
木乃伊の手首

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木乃伊の手首

【Nコード】

N0150F

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

美奈子に送られてきた郵便物。それは新たな事件の始まりだった。桜井美奈子の秘密に迫る作品をめざしています！

第一話「発端 時雨」

慶応三年八月

「……………これですね」

そう、指を指された先にあるモノを見た時、沖田総司が出来たことは、うめき声を口の中で殺すことだけだ。

地獄の底へ下るような、深い地の底への旅の果てに、彼はそれを確かに見た。

「……………これは」

キユッ

思わず後ずさった総司の横に立つ少女が、そつと総司の手を握った。

手に伝わる、華奢で柔らかい感触が、総司の心に生まれた戦慄を和らげてくれる。

連れてこなければよかった。

総司は、少女の横顔へ盗み見るような視線を送り、後悔した。

これは、女子供の見ていい代物ではない。

「時雨殿」

齊藤一が言った。

相変わらずのポーカーフェイスのせいで、感情が判らない。

「……………これは一体？」

「私の先祖にして、前任者です」

時雨。

そう呼ばれた女は、楚々とした声で答えた。
いつの間に着替えたのだろう。

白装束に身を包み、髪を下ろした女が目の前のモノを見上げる視線を外そうとはしない。

モノ

松明と龕燈がんとうちん提灯に照らされた先にあるモノ。

漆黒の闇の中に浮かぶそれを見た総司は最初に巨大な干物を連想した。

黄ばんでボロボロになった布に包まれた干物が岩壁に張り付いている。

本気でそう思った。

近藤や土方から、“その世間ズレした発想をどうにかしろ！”と叱られてばかりの総司は、天性の純粹さ故にそう発想したにすぎない。

否。

総司でなくても、そう思ってしまう。

黄ばんだボロ布は白装束。

干物の上部には、油が抜けた黒髪が張り付いていた。

そう……

人間の　　ミイラだ。

十字架にかけられた罪人のように、手を左右に広げ、まっすぐ立った姿勢のまま、ミイラは岩壁に張り付くような姿勢で、その場にいた。

「記録では慶安4年（1651年）、由井正雪の乱があつた年になりますね」

時雨の斜め後ろに立つ背の高い男が、場違いなほど飄々とした声で言った。

「それから200年以上　よく持ったモノです」

男は、そつと手を合わせた。

「200年に渡り、この天下を乱す者を防ぎきつた貴女に感謝します」

光に照らし出された長い髪は、何一つ答えない。
ぼろぼろに崩れかけた皮膚と肉もまた、無言のまま。
黒く窪んだ眼窩に宿る光は、ない。

「……はい」

時雨は小さく、しかし、力強く頷いた。

「これからは　私です」

「私は一体、何年を保つことが出来るのでしょうか」

「何年でも」

男は楽しげに頷いた。

「それこそ、千年万年、千代に八千代に」

クスッ。

時雨はそつと袖で口元を抑えながら笑った。

「最後に笑わせていただき、感謝いたします。松笛殿」

「あなたには」

松笛　そう呼ばれた男は、頷き返した。

「私を殺してもらえ　　そう、信じていたのですがね」

「これもまた、運命さだめというものです」

「運命さだめ　　ですか」

ふつつ。

ため息と共に、松笛は言った。

「イヤな言葉です」

「本当に」

「本当ですよ　　さて」

松笛は振り返った。

そこには、目の前に存在する不気味な物体を前に、言葉を失っている侍達の一団がいた。

「新撰組の皆様には、力仕事をお願いします」

「力仕事？」

斉藤がいぶかしげに言った。

「まさか、“あいつを降ろせ”とか、いわねえだろうな？」

「正解です」

岩肌をよじ登り、ミイラを降ろす作業に入った新撰組の隊士達を見守りながら、

「……お話は、聞いているのですが」

沖田の横に立っていた少女が松笛に言った。

「今、目の前に現実として存在しても尚、信じられません」

「“彼女”は、“器”にすぎません」

松笛は言った。

「器の強弱が、中身をこぼさない秘訣ではありませんが」

「一体、誰がこんな残酷なことを」

「水瀬家は絡んでいない　？」

「知りません」

少女はムキになってそっぽをむいた。

「私は水瀬家からは追放された身です」

「唯一の正統なる後継者はあなただというのに」

松笛は、残念そうな顔で少女の端正な横顔をみつめた。

松明に照らし出される少女の若々しい肌が、陰鬱な世界に染まりかけている心を、浄化してくれる。

「どこもそうですけど、お家騒動は」

「その話は」

少女は松笛の言葉を遮った。

「しないでください」

「……それが、お望みでしたら」

ミイラが降ろされるのを見守りながら、松笛は頷いた。

「華より団子。家より総司君ですね？零殿は」

「なっ!?!」

一瞬にして耳まで真っ赤になった、零と呼ばれた少女が、何かを言い返そうとした時、

「ちよっと」

つんつん。

零の肩を何かがつついた。

振り返ると、妙齢のびっくりする程の美女が自分の後ろに立っていた。

名を、梅。という。

「零ちゃん。お化粧するから手伝っておくれ」

「はい」

「まあ、あなたにや」

赤い天鷲絨てんじゆの絨毯が敷かれ、石の上に据えられた幾本もの蠟燭が白装束の女性を照らし出す。

化粧道具を用意しながら、梅は言った。

「いろいろ恨み辛みもあるけどさ」

「……」

時雨は、正座したまま、無言でその言葉を聞く。

「女同士で、最後にしてやれるのはこの程度さね」

「ありがとございます」

「よしなよ。礼はいらないさ。ねえ？零」

「はい」

零は力強く頷いた。

「時雨様？お梅さんは、お化粧がとても上手なんですよ？私もしっかり教えてもらって、いつかお梅さんの死に化粧を」

ガンツ！！

梅の一撃が、雫の脳天に炸裂した。

「まったく！総司君に毒されすぎだったの！」

頭を抱えてうずくまる雫を睨み付けた梅は言った。

「私や遊郭育ちさ。化粧はお手の物。責任もって、三国一の美人に仕立ててやるよ？」

「降ろしたぜ」

女性達が化粧に勤しむ中、むしろの上に降ろされたミイラを前に、斉藤は言った。

その顔には、あからさまな嫌悪感が漂っている。

「それにしても、コイツは一体？」

「聞いていませんか？」

松笛は、おや？という顔になった。

「俺達が聞いているのは、こいつとあんたの道中を護衛することだけだ」

「そうですか？」

松笛は首を傾げた。

「近藤局長にはお話したのですがねえ」

「どこでだ」

「酒の席で」

「あの飲みすけが酒の席のことなんて覚えてるもんか！」

斉藤が言った。

「翌日にや、小便と一緒に全部流しちまってるわ!」

「……成る程?」

無理もない。

松笛は、不思議と何度も頷くと、不意にミイラを指さした。

「この道中の目的は、このミイラにあります」

「……」

斉藤達は、訝しげに松笛と横たわるミイラを見比べる。

「どつという意味だ?それは」

「このミイラの子宮の中には、恐ろしいほど厄介なモノが巣くっています。ミイラは、それを封印するための器なのです」

「……つまり」

京の都に来てから幾度となく、敵として味方として目の前の男と関わってきた斉藤は、不親切極まりない松笛の説明を、脳内で補足した。

「何だか得体の知れないバケモノを、女の体に閉じこめているって寸法か?」

「ご明察」

「壊しちまえ。んなモノは」

斉藤は、とっさに部下の隊士が持っていた松明を掴んだ。

「こんな干涸らびてるんだ。盛大に燃えるだろうよ」

斉藤が、ミイラに松明を近づける。

それを止めたのは松笛だ。

「破壊することは出来ないのです」

その声は真剣だ。

「かつて、阿部清明、倉橋くらはし 時深ときみが東になって何とかしようとして出来なかった」

「……燃やす程度じゃすまねえ、ってか？」

松笛は無言で頷いた。

「ならせめて」

隊士に松明を押しつけ、斉藤は訊ねた。

「こいつの腹の中に何がいるのか、それと、あの女は何なのか、教えてくれ」

「ここまで来たのです」

松笛は頷いた。

「聞く権利はあるでしょう」

「……」

「河内時雨……あなた方にとっては敵の中の敵。彼女はこの」

松笛の指先には、ミイラがいた。

「彼女のご先祖様に代わり、新たな“器”となる」

「……器には、何を入れる？」

松笛から、斉藤達が何を聞いたのか。

隊士の全員が、一切、語ることなく世を去ったため、一切が不明のままである。

ただ、斉藤の言葉として、こんな言葉だけが残っている。

「近藤さん達は、俺達に何も言わなかったんじゃない。何も言えなかったんだ。」

もし、俺が近藤さん達の立場でも、そうしただろう。

“それ”を知っているなら、誰でもそうするさ」

約200年前の話であった。

第二話「屈辱と復讐 その原因」

ビリッ！

胸元に響いた音に、ついに固く閉じられていた瞳が見開かれた。乳房を乱暴に握りしめられる痛みが、全身を螺旋のように駆けめぐる。

せめて逃げようと体をよじらせるが、ベッドに拘束された身では逃げようもない。

乳房に舌が這い回るおぞましい感覚に悲鳴を上げる。

やめてくれと、何度も哀願するが、それさえ耳に届いていない。

出来ることがあるとすれば、この悪夢が一瞬でも早く終わってくれることを祈るしかない。

祈る？

何に？

神から最も遠い存在である私は、何に祈る？

女として最も大切な場所を覆い隠す布が外された。

自分の身に、これから何が起きようとしているのか、わからないわけではない。

信じたくないだけだ。

誰にも触らせたことはない。

誰にも、見せたことさえない。

その場所が今、乱暴に開かれ、男の見せ物になっている。

体が壊れてもいい！

男の視線から逃れるなら、死んでもいい！

狂ったように暴れるが、万力のような力で腰を押さえつけられた身で、逃れることは出来ない。

抵抗することさえ、言葉で煽る口実を男に与えるだけだと思い知らされるだけだ。

下腹部に走る虫酸が走るような嫌悪感が、徐々に鈍いような、くすぐったいような、不思議な“刺激”へと変化して行く。

下半身が、むず痒い。

弄ばれ、聞くに堪えない言葉にまじり、卑猥な音が耳に届きはじめたのは、それからすぐのことだ。

水をこねくり回すような音が、何を意味するか。

その音源が自分であるという羞恥と屈辱が、精神を容赦なくむしばんでいく。

みんなが、こんなこと、されたんだ。

もはや為す術もなく、耐えることだけが、出来ることだと思いき知らされた。

ディアナも、クリスも、ベスも……みんな、こんなこと、されたんだ。

不思議系のディアナ。

ボーイツシユなクリス

大人っぽいベス。

大切な友達。

彼女たちもまた、こんな屈辱を味わわされたんだ。

そう思うだけで、涙があふれてくる。

不意に、腰を拘束していた力が緩んだ。

一瞬

終わった？

疑いつつも、希望の光を見た気がした。

だが……

「っ！！」

体が引き裂かれた。

本気でそう思ったほどの激痛に、美声を讃えられる喉から悲鳴が

絞り出される。

自分の体に、何が入れられたのか。

自分の体が、どうなったのか。

女の子として

否。

女としてわかる。

男が、容赦なく体を弄び始める。

腰同士が激しくぶつかり合い、血の混じった水音が響き渡る。

そのたびに遠のく意識を、乳首に走る甘い痛みが現実へと引き戻す。

痛みにグシャグシャに泣き崩れた顔、乱れた髪を直す余裕なんてない。

ただ、これが悪夢であること祈るだけだ。

何が夢で、

何が悪夢で、

何が現実なのか

何も判らなくなっていく。

ソノウチ、キモチヨクナッテイクヨ？

男は、強引に唇を奪い、舌を顎の中にねじ込んでくる。

吐き気を催す嫌悪感の中で、そう囁かれた。

そうかもしれない。

屈辱より

苦痛より

快樂の方がいい。

溺れてしまえば、きっと、そっちの方がマシ。

いつしか、そう思うようになった。

痛みが快樂に変わるように。

悲鳴ではなく、歡喜の声が出ますように。

溺れてしまえば、逃げる事が出来る。

私は、逃げてしまえばいいの？

逃げる？

何から？

悪夢から。

悪夢って？

今、されていること。

男の動きが激しさを増し、息が荒くなっていく。

男がうめき声をあげた、次の瞬間、

胎内に、焼けるような熱が走った。

体そのものが焼き払われたような悪寒の中、暗い闇の中へと、意識は落ちていく。

ぼんやりと浮かぶ、自分を見つめている男の顔。

女の子としか思えない顔。

そこに浮かぶ視線は、あからさまなまでに、自分を見下していた。

許さない。

遠のく意識の中、自分が男を睨み付けることが出来たかわからない。

絶対に、許さない！！

その言葉を心に刻みつけ、意識を失った。

ぐったりとする女から身を離し、少年は改めて女の体を眺めた。

自分が女にしてやった。

男の身勝手な言い分を呟きながら眺める女の体は、折れそうなほど華奢だ。

体つきからすれば、中学生。

自分と同じくらいだ。

その体は、鎖と革手錠によってベッドに拘束され、女の子からは白い白濁物と共に、うっすらと血が流れている。

ツインテールの金髪が乱れ、白い肌には、自分が残したキスマークが淫らかな跡を残している。

その全てが、少年を満足させる。

ベッドの脇に置かれたタバコに火をつけ、数回吸った。

肺に入り込む煙にむせび、少年は灰皿にタバコをねじ込んだ。

これで

涙の跡が残る端正な顔を眺めながら、少年は思った。

5人全員、僕のモノになった。

僕のモノ。

そう思うだけで、再び下半身が熱を帯びる。

ムラムラとした、どす黒い欲望がわき上がってくる。

もっと、女を楽しみたい。

女が快楽に溺れる姿が見たい。

先日、やっと絶頂を覚えたのはあの巨乳のメガネだったな。

清楚な女があれ程乱れてくれるのは、思い出だけでたまらない。

少年は、ベッドから降りると、そのまま部屋を後にした。

少年はその時、忘れていたのだ。

自分がモノ扱いた少女達が、一体、どういふ存在であるかを。

ぐったりとした少女が横たわる部屋の外。

「なっ!?!」

ドカバキグシャツ!

少年の短い悲鳴と、骨肉を砕く音が響く。

すぐにドアが開かれ、入ってきたのは4人の少女達。

「……エルシイ」

ベッドの脇に立つ黒髪の少女が、ベッドの上に横たわる少女を沈痛な視線で見る。

「エルシイにまで手を出すなんて!」

黒髪の少女は、きびすを返すと部屋を出ようとした。

「アリス、どうしたの?」

その腕を止めたのは、メガネをかけた少女。

「止めないでベスっ! あいつを殺しにいくのよ!」

アリスは答えた。

「袋だたきにしてダストシューターに放り込んだだけじゃ、気が収まらないっ!」

「力を封じられた私達には、彼は殺せないわ」

「くっ!」

「復讐の時を待つよ。アリス」

「……」

「クリス、ディアナ」

メガネをかけた少女、ベスは、アリスから手を離すと言った。

「エルシィを連れて逃げます。金庫は破ったわね？」

「はい」

「現金が日本円で10億ですから、しばらくは暮らせませす」

「よろしい」

ベスは、ちらりとアリスに視線を向けた。

「あなたがリーダーよ？アリス？」

「っ！」

カッと頬を赤く染めたアリスは気色ばんで言った。

「逃げるわよ！？いずれ、絶対に、この国で、あの男を殺すために

！」

第三話「送られてきたモノ」

「美奈子お？荷物が届いたわよお？」

玄関からの母の声に、リビングでテレビを見ていた美奈子は、怪訝そうな声をあげた。

「私に？」

心当たりがないが、ソファーから立ち上がると、美奈子は玄関に出た。

玄関で、美奈子の母が細長い包みを抱えていた。

茶色い包み紙で乱暴に包んだらしい。あちこちが破れていたり、シワがよっている。

美奈子は、一目でマトモな業者からの郵便物ではないことを悟った。

「何？またヘンな本？」

「ヘンじゃないわよ」

包みをうけとった美奈子は、答えながら重さや包みを調べる。

「普段は参考書頼んでいるの。私はマジメな本を頼んでいるんだって」

「男の人同士でナニするお話が、あなたはマジメなお話だった？」

エプロンにハンコを仕舞いながら、美奈子の母は言った。

「お父さんとお母さん、どこで育て方間違えたのかしら」

「な、何の話？」

「ベッドの下にHな本隠すなんて、あなた男の子じゃないんだから見たの!？」

「あなたね」

美奈子の母は、あきれ顔で娘を見た。

「あんな所に隠しておくなんて、見てくださって言うてるのと同じだって、何でわからないの？」

「っ!」

「で？」

美奈子の母は、娘が持つ荷物を指さしながら言った。

「その中身は？」

「知らない」

美奈子はふてくされた顔で答えた。

「大体、荷物に送り主の名前が書いてないもの」

「心当たりは？」

「ないなあ」

美奈子は首を傾げた。

何度か荷物を振ってみるが、音がしない。

「開けてみるか　お母さん、ハサミ貸して？」

「成る程……ね」

出されたコーヒーを飲みながら頷いたのは理沙だ。

テーブルの上に広げられた包みの中身を前にして、平然とした顔でクツキーまでかじっている。

包みの中身を見た途端、母親が卒倒。自身も腰を抜かした美奈子は、震える指で電話を掴んだ。
相手は理沙。

半ばパニックになった美奈子から必要事項を聞き出した理沙は、10分程で来てくれた。

“途中、道ばたに転がっていた”と言う、背中にタイヤの跡がくつきり残る女の子の襟首を掴んだ理沙は、未だテーブルに放り出された包みを見た後で、平然と美奈子にコーヒーを要求した。

「これは、警察わたしに連絡寄こして正解だわ」

「で……ですよね」

美奈子は、包みの中身を見ようとしない。何とか見ずに済ませようと下を向いている。

「お母さん、寝込んで……」

「普通はそうじゃない？」

理沙は、手袋をした手で、興味深そうに包みの中身を取り出した。包みは、段ボールの箱に真綿を詰め込んで、そこに中身を収めていた。

美奈子が揺すっても音がしなかったのは、この真綿のせいだ。

「ふうん……？」

「あの……理沙さん？」

美奈子は、下を向いたままで訊ねた。

「何？」

「よく、そんなの持てますね」

「やだ」

理沙は笑った。

「こんなの怖がってたら警官やつてられないわよ？」

「……」

「年寄りの孤独死の現場なんて行ってご覧なさい。人生観変わるから」

「……遠慮します」

「で？」

理沙は、自分の横に座る小柄な女の子に尋ねた。

「水瀬君？ どう見る？ このオモチャ」

「へ？」

美奈子は思わず理沙を見た。

理沙はニヤニヤした視線を一度だけ、美奈子に向けた。

「お、オモチャ？」

「あつたり前でしょう？」

理沙は笑いながら答えた。

「これがホンモノだったら、私がひっくり返っているわ！？」

「なっ……!!」

「いい?美奈子ちゃん」

理沙はコーヒークップをテーブルに置くと、身を乗り出して美奈子に言った。

「これは、名探偵桜井美奈子に対する挑戦?違う違う。これはね?嫌がらせてっていうの。こういうオモチャを送りつけて、美奈子ちゃんが困惑する姿を“想像”して悦にいる。そんな小者がしかけた、タチの悪い、くだらないイタズラ」

理沙は、まるで美奈子に噛んで言い聞かせるように言葉を句切りながら言った。

「これはニセモノで、送られてきた理由はイタズラ。わかる?」

「は……はあ」

美奈子は、理沙の横に座って、理沙の言う“オモチャ”を矯めつすが眺めつ 眺める女の子 水瀬の反応を待った。

臭いまで嗅ぐ水瀬は、無言で理沙にそれを手渡した。

理沙は自信満々で訊ねた。

「よく出来てるけど、これって何製?」

「?」

「ラバー製にしては……こう、張りというか、何というか」

「……切断は鉋か手斧だね。鋭い刃物は使われていない」

「そういう風に見えるように造ったんでしょう?その……特殊メイクで」

美奈子は、水瀬が言おうとしていることがわかって、目の前が真っ暗になった気がした。

「……お姉さん」

水瀬は、理沙に両手でしっかりとそれを握らせてから言った。

「桜井さんと仕事でつき合っているんだから、そろそろ現実見た方がいい」

「……どういう意味？っていうか、キミとのつきあいなら納得できるよ？それ……って」

理沙の口は、それ以上の言葉を紡げなかった。

水瀬の目を見たからだ。

水瀬の目は、決してふざけていない。

本気だ。

機械のような冷たい視線の先にあるのは、自分が両手で持つ物体。美奈子の母親を卒倒させ、自分が呼ばれた原因。

理沙は、それと水瀬を交互に見た。

「……まさか」

「殺人事件にはならない……と、思う」

水瀬はテーブルに置かれたコーヒーに手を伸ばした。

「……器物損壊……か、遺体損壊……は、違うかなあ」

「……」

理沙は三回深呼吸して、手にしたモノを綿の上に置いた。

「……つまり？」

「細かいことは鑑識じゃなくて、専門機関に任せないと僕にもわからないけど」

水瀬は言った。

「性別不明。はっきり言えることは、人間の、右腕の手首から上のミイラだったこと」

「そ、そんなものを！」

卒倒した理沙が椅子から転げ落ちそうになるのを抱き留めた水瀬の前で、美奈子が半泣きになりながら言った。

「な、何で私に!？」

「…………あのね？」

包みの中身　人間のミイラの一部　を、美奈子に見えな
いように包み紙で隠した後、

ソファア、貸してね？

理沙を抱きかかえた水瀬が理沙をソファアに横たえる。

「…………多分だけど」

水瀬は美奈子に振り返った。

「これ　正確には、桜井さんに送られたんじゃないかも」

「ど、どういうこと？」

「うん…………」

水瀬は、困惑したような顔をした。

「単に、僕のカンなんだけど…………」

「カン？」

「うん…………よく見て？」

水瀬が美奈子の前に広げたのは、包みだ。

「切手が二千円分も貼り付けられているし…………」

水瀬の指が、宛先の文字を指した。

「桜井さんは、自分宛だって言われて、そのまま信じちゃったんだ
と思うんだ」

「…………あつ」

美奈子は思わず声をあげた。

そこに書かれているのは、自分の家の住所と、そして

桜井 美那の子

そう、書かれていた。

「桜井美那って……誰か知っている？」

「う……うん」

美奈子は困惑気味に頷いた。

「き、去年亡くなった私のおばあちゃん」

第四話「敵」

「おばあちゃん？」

「う……うん」

美奈子は頷いた。

「桜井美那って、確かに私のおばあちゃんの名前」

「いくつで亡くなったの？」

「……確か」

美奈子は指折り数えた。

「75……だったかな」

「早死にだね」

「そう？」

「桜井美那の子……“の”が小さいのと、“那”の字が曖昧な書き方しているから、おばさん、“美”と“子”だけで桜井さん宛の荷物だって思ったんだね。きつと」

「で……でも」

美奈子は、泣き出しそうな顔で水瀬に言った。

「ど、どうしてお母さんに？」

「……」

水瀬は、首を横にふった。

「おばさんに心当たりがあるかもしれないし、ないかもしれない」

「答えになっていない」

「……桜井さん」

水瀬は、包み紙の宛先をもう一度、見た。

「何？」

「桜井さんのお父さんって、もしかして婿養子？」

「う、うん」

美奈子は頷いた。

「お母さんは家付きの一人娘だったんだよ？この家と、隣近所は全

部、ウチの土地だったって聞いたことが」

「成る程ね」

水瀬は、しきりに感心した様子で言った。

「相手は、かなり古い情報しか掴んでいない

そう判断して良

いね」

「古い……情報？」

「そう」

水瀬は頷いた。

「多分……ううん？これ、送ってきた人が知っていることは、桜井さんのおばあさんに子供がいる事と、ここに住んでいることだけ。

この情報の中に、桜井さんのお母さんや、桜井さん自身が含まれているかといえば……」

「お、お母さんが！」

美奈子は怒鳴るような声で水瀬の声を遮った。

「お母さんが何したら、こんなモノを！？」

「それはわからない」

水瀬は平然と答えた。

「何を考えて、こんなモノを送ってきたのか。どうして、桜井さんのおばあさんやお母さんが相手なのか。どうして、桜井さんのお母さんの名前を、相手は知らないのか」

「……」

少しだけ冷静に、美奈子も考えてみた。

宛先は美奈子の母　らしい。

だが、宛先に祖母である“桜井美那の子”と書いている。

意図的に書いたのでなければ、相手はその名を知らないことになる。

送りたい相手の名前を調べないなんて、バカな話は考えられない。

しかも、中身は人間のミイラの一部。

「……そんなに嬉しい？」

「……」

首を傾げる水瀬と指輪を交互に見た美奈子は、呼吸を再び整えようと、感情のない、冷たい声で言った。

「水瀬君？」

「何？」

「この指輪……どういづつもりで私の指にはめたの？」

「あつ、それ？」

水瀬は自身満々に答えた。

「追跡装置に反応する機能が仕込まれてるんだ。僕の自信作」

「……」

「……どうしたの？」

「……」

「さ、桜井さん？どうして包丁なんて持ってきたの？あ、あのね？文化包丁って刺されたら危ないんだよ？」

「……」

「さ、桜井さん？ぼ、僕、何かした？」

水瀬は文化包丁からしたたる自らの血で、以下の一文を美奈子に書かされた。

贈与証明書

『私こと水瀬悠理は、桜井美奈子に対し、下記を贈与したことをここに証明します。』

贈与品 婚約指輪（追跡機能付）一式

以上
『

「ひ……ひどい目にあった」
理沙の部下達が桜井邸周辺を見回っていること。
そして指輪に仕込んだ追跡装置が正常に機能していることを確認
した水瀬が、ボロボロになった体を引きずって桜井邸を出たのは夜
の11時を回った頃だった。

人気のない夜道を歩きながら、水瀬はずっと考え込んでいた。

桜井美奈子。

少なくとも両親に至るまで犯罪記録はない。
ごく平凡な家庭の、何の取るに足りない少女。
近衛でさえ、そう認めただけだ。
その子に、ミイラの手首を？

一体……何が目的だ？

警告？

水瀬が最も最初に連想したのは、それだ。

じゃ、何の？

もし、警告だとして、何故、ミイラの手首でなければならぬ？

第一、あのミイラは誰？

気が付けば、水瀬は公園にさしかかっていた。

公園の入り口にある電話ボックスの灯りが暗闇の中でも悲しい光を産み出している。

「いけない」

水瀬は、ルシフェルに連絡をいれるのを忘れていることに気づいた。

「連絡いれないと、お小遣いへらされちゃうからね」

水瀬が電話ボックスのドアを開いた、まさにその時。

ズンッ!!

鈍い音を立て、電話ボックスは粉々に吹き飛んだ。

まいったな。

水瀬は宙を舞いながら舌打ちした。

破壊され、炎上する電話ボックスが足下から遠ざかっていく中、水瀬が心配したのは己の身の安全ではない。

あれ、僕が弁償することにはならないよ……ね？

そういうことだ。

近くに監視カメラはなかったはずだから、

とつとと逃げる。

これに勝る対応はない。

一度、民家の屋根に着地、再び跳躍しようとした瞬間は、その時だった。

「っ!」

シュンッ

水瀬の頬を何かがかすめた。

とつさに体が動いたから助かったようなものの、反応が少しでも遅れていたら、今頃、水瀬の命はなかつたらう。

「くない?」

騎士としての水瀬の“眼”は、飛来した物体の形状を把握していた。

「くないなら忍び……だけど」

違う。

何か、今、飛んできたモノは、何かが違う。

飛び道具というか、投擲出来るナイフなのは間違いない。

ただ、柄についた金属製のU字は一体?

どこかで見たけど、思い出せない。

水瀬は大きく後ろに飛び去りながら、敵の位置を掴んだ。

前方に2人、後方に3人の5人。

敏捷性、攻撃の命中精度云々、どれをとっても、戦闘能力はそれほど高くない。

敵としての脅威は低い。

「殺しちゃ……まずいか」

水瀬は“魔法の矢”の出力を低めに設定することに決めた。

夜の住宅街。

街頭と家々の窓から漏れる灯りが、宝石の海さながらに飾り立てる中、水瀬は宙を異動する。

敵を殺さないと決めた。

その理由の一つが、敵の狙いを知ること。

そしてもう一つが

トンッ。

トンッ。

屋根を跳ねる複数の音。

敵が空を飛べないことは、跳躍を繰り返す動作から間違いない。

つまり、敵は魔法騎士ではない。

だから、水瀬は同じように跳躍を繰り返し、“ここ”に来た。

ここ　　つまり、廃工場だ。

長い間放置され、屋根に大きな穴が開いた、さび付いた工場跡。

穴から入る月明かりが唯一の照明の世界。

まるで青白いスポットライトを浴びる俳優の様に、水瀬はその中へと降り立った。

タツ ズサツ
タツ ススツ

同じように降り立つ音は恐ろしく軽い。

「……あのね？」

水瀬は、抜刀しない状態の霊刃を片手に、闇の中へと語りかけた。

「僕 女の子を殺したくないの」

返答はない。

「僕、ここまでされる恨み買うような覚え、ないんだけど」

シュン シュシュシュンツ！！

返事の代わりは、得体の知れない飛び道具。

キンツッ！

水瀬はそれにたじろぐ様子もなく、ただ元の姿勢のままにいる。
起きた変化は、その周囲に、砕かれた飛び道具の破片が散乱した
だけだ。

「答えて 僕に何の用？」

「 ミナセ」

正面の闇の中から、女の声がした。
まだ年は若い。

「 28年前を忘れたとは言わさないぞ」

第五話「襲い来る過去」

「ミナセ」

正面の闇の中から、女の声がした。
まだ年は若い。

「28年前を忘れたとは言わさないぞ」

「……28年？」

「28年です」

次は右後方から。

正面の声より落ち着いた声だ。

「あの屈辱……私達は 永遠に忘れることは出来ません」

「あ……あのね？」

「……28年もの長き間、私達は苦しみ続けてきた」

正面の闇の声は怒りに震えている。

「寝ても覚めても……あの時の屈辱、悔しさ、痛み……全てが私達を狂わせる」

水瀬は、自分を取り囲む者達の感情の変化を敏感に感じ取った。

それは、怒りであり、悲しみであった。

「あの……僕は」

だから、水瀬は余計に困惑せざるを得ない。

28年前といえば、自分はまだ生まれていない。

生まれる前のことでどうして僕が命がけで責任をとらなければならぬ？

そんなバカな。

「偶然とはいえ、この極東の島国で貴様と出会えたことに……私は感謝する」

「あの……何度もすみませんが……お話が全っ然、読めないのですか？」

「ここで」

ザッ！

闇の中から放たれる凄まじいほどの殺気の結界が水瀬を完全に封じ込めた。

「ここで、貴様を殺すっ！」

「だから」

「八つ裂き程度で済むと思うなよ!？」

「僕は　わっ!？」

四方八方から飛んでくる飛び道具。

水瀬が驚いたのも無理はない。

先程の飛び道具から身を守ってくれた魔法障壁が一瞬にして貫通されたのだ。

「対魔法防御が!？」

「貴様が何者か、そんなことはとうにお見通しだ！」
パシッ！

闇の中から飛び出してきたのは、黒い装束をまとった自分と同じくらいの年頃の少女達。

黒髪のボーイッシュなタイプの少女が、奇妙な形状のナイフを手に襲いかかる。

「そう簡単に死ねると思うな!？」

「くっ！」

タンッ！

水瀬は、黒髪の少女の一撃をかわすと、地を蹴った。

「逃がすかつ！ベスッ！ディアナッ！」

「えいつ！」

宙では圧倒的優位に立つはずの魔法騎士である水瀬が、いまや防戦一方だ。

金髪をツインテールにしてあどけない女の子が、右斜め後ろに出現。

同時に投擲された10本近い飛び道具　投げナイフが襲いかかってくる。

「これって!？」

水瀬は目を見開いた。

相手のスピードが速すぎる。

ナイフをかわすのがやっとだ。

違っ。

そっ。

違う。

この彼我の速度差は何だ？

何だ？

この違和感は！？

時間が経つにつれて、まるで相手が徐々に速くなっていく様に思えてならない。

思えて？

違うっ！

実際に速くなっているんだ！

それさえ違う！

相手が速くなっているんじゃない！

自分が、遅くなっているんだ！

一体、何が！？

「“ここ”では私達の方が上だっ！」

黒髪の少女はそう叫ぶ。

「逃げたつもりだったろうが、私達に誘い込まれたことに気づかないとはなー！」

「くっ！」

その言葉を、水瀬は否定出来ない。

時間が経てば経つ程、自分が不利になっていくだけだ。

「これ……高いのに!!」

水瀬は、懐から護符を取り出すと、護符に封印された呪文を発動させた。

「なっ!?!」

シュンッ

空気が抜けるような音を立て、突然“エモノ”の姿が消えた。

“敵”を切り刻むつもりで振り下ろしたナイフが虚しく宙を斬る。

「バカなっ!」

黒髪の少女は、目を見開いて周囲を見回した。

敵の姿はどこにもない。

完全に、消えていた。

「ど、どうして!?!」

崩れずにいた工場の屋根に着地して再び周りを見回す。

「どういうこと!?!ベスッ!」

黒髪の少女の近くに着地したのは、金髪のメガネ少女。

勝ち気な印象を与える黒髪の少女と違い、恐ろしく大人の印象を受ける落ち着いた少女だ。

「“結界”が不完全だったの!?!」

「いえ……」

“ベス”と呼ばれた少女は思案顔で首を横に振った。

「“結界”は完璧でした。“敵”の魔法に対しては」

「じゃあアイツは!?!」

「テレポートで逃げたのは間違いありません」

「結果が完璧で、どうしてテレポートが使えたのよ！」

「ですから」

ベスはニコリと微笑んだ。

「あの御方”以外の魔法が発動されたのです。たとえば、呪符とか」

「やめてよ、その呼び方！アイツをそんな呼び方するなんて！」

黒髪の少女は掴みかからんばかりの勢いで怒鳴った。

「あんた、自分がアイツに何されたかわかってるの!？」

「ええ。わかってるわ。アリス」

ベスはニコリと微笑んだ。

「ただ、あなたと私では、相手に対する想いが違うだけ」

「……あの時、あなたは誓ったはずよ？」

「当然、覚えているわ？」

「ならっ！」

「誓いにウソはない」

ベスは手にしたナイフを服の中へしまい込んだ。

「あなたは憎いから、私は愛しているから　だから殺すの……」

あの人を」

「……」

「ああ。エルシイ？」

「は、はいっ!？」

先程、水瀬にナイフを投げつけたツインテール女の子が、驚いて飛び跳ねた。

「な、なんですか!？お姉さまっ!」

「その帽子についている針」

「えっ!？」

ベスは、エルシイと呼ばれた少女に近づくと、そっと少女の帽子を指さした。

「魔法による発信器ね」

「エルシイっ！」

「もう。アリスったら、エルシイが怖がっているでしょう？どつしてイジメるの」

「だって、発信器しかけられるなんて！」

「さすがはあの御方ね。あの瞬時にそんなマネをするなんて」

「っ！エルシイっ！壊しなさいっ！」

「待ちなさい。エルシイ」

ベスは言った。

「そのまましておきなさい。そして、大切に身につけておくのです」

「えっ!?!」

「針には糸がついている　あの御方は、その糸をたどってきます」

「……“発信器”をエサに誘い出すと？」

「クリス。その通りです。私達が日々探す必要はどこにもありません」

「そうか……ならいい」

「では、今回は失敗でしたが、次は成功させましょう」

「帰ったら結界張り直さなくちゃ」

「ふふっ。たっぷりと仕掛けもして差し上げましょう。ところでエルシイ？」

「はい？」

「“あの娘”の様子は？」

「あ、はい。家で……今、眠っています」

「女に襲われただと？」

場所は、南青山の某高級マンションの一室。

ウィスキーをストリートである由忠の前で、水瀬は腕に包帯を

巻きながら頷いた。

「うん。戦闘能力は高くないけど」

「戦闘能力が低い雑魚が束になったとしても、お前には勝てまい…
…で？」

薄暗い照明だけの室内で、由忠はグラスをベッドのサイドテーブルに置いた。

「殺したんだろうな？」

「ううん？」

腕の具合を確かめた水瀬は、床に転がっていたクッションに座った。

「逃げた」

「逃げた？…敵がか？」

「僕が」

「お前の方が！？」

「うん。綾乃ちゃんトコのおばさんから売りつけられた呪符使った。だって、こっちの移動速度は遅くなるし、向こうは速くなるしで」

水瀬は、あの廃工場で起きた現象を説明した。

由忠は、怪訝そうな顔になった。

「かんせいけつかい陥穽結果に墜ちただけじゃないのか？」

「何ソレ」

「あらかじめ、ターゲットの魔法特性を把握しておき、それに対応した結果のこと。いわばターゲット専用の結果のことだ。対高位魔法騎士戦の常識だ」

「ということは、あれは僕専用の？」

「いや…おそらく、お前によく似たターゲットだろう」

由忠はポトルを掴みながら言った。

「かんせいけつかい陥穽結果はかなり強力だ。もし、陥っていたら、お前は魔力を發揮出来ない。となれば、確実にお前でも殺されている」

「そんな結果、すごく手間がかかるシロモノだよな？」

「ああ　魔法特性を把握・分析するだけでも膨大な時間と手間

がかかる」

「ふうん？」

「心当たりが？」

「ううん？」

水瀬は首を横に振った。

「よくわかんない　もし、これからも僕を狙うなら向こうから来てくれるだろうし」

「そうか……」

カラン。

由忠の手の中で氷が鳴った。

「親として言えることは　降りかかった火の粉は払いのける…

…位だな」

「うん」

水瀬は頷くと、クッションから立ち上がった。

「ありがとう。お父さん　じゃっ！」

ガッ！

ゴキッ！

由忠は頷くと、とっさに駆け出そうとした息子の襟首を捕まえた。息子の首からへんな音がしたことに、由忠は何の感心もみせない。

「まあ、待て」

「い、痛たたつ……は、離してよ！バスに遅れちゃう！」

「……地獄行きのバスならいくらでも呼んでやる」

「……ううっ」

「コレについて」

由忠が親指で指し示すのは、二人のいる室内。

ガラスは割れ、カーテンは破れ、家具は軒並み粗大ゴミ同然に砕かれている。

由忠の座るベッドの奥では、水瀬が見たことのない裸の女性がシートにくるまって震えていた。

「どう言い逃れするのか、聞かせてもらおうか？」

「……えつとね？」

水瀬は顎に人差し指の先をつける独特な仕草の後、言った。

「予め設定しておくレポートの座標は、簡単にわかんないところ
がいいなって、そう思ったの。で、お父さんが愛人との逢い引きに
使うのこの部屋なら問題ないだろうって。」

でも、いざ使ってみたら、レポートの反動で室内グシャグシャ。
しかも偶然、お父さん達がお楽しみ最中だった　と

「悠理」

由忠は額の青筋を一つ増やした。

「いいか？覚えておけ。この部屋は、逢い引き用の部屋なんかじゃ
ない」

「違うの？」

「この女の部屋だ」

「……ああ」

ポンツ。

水瀬は感心したように手を叩いた。

「手切れ金？」

「違う！」

「代官山に新しく借りたマンション、あそこに本命がいるのかと思
ってたんだけど？それとも、高円寺の方だった？てつきり、一番古
いここ、手切れ金にしたのかと」

「ば、バカモノっ！」

由忠の拳が虚しく宙を切り裂く。

「何というヤバいことを！」

由忠は、後ろから放たれる殺気を確かに感じた。

「　　由忠さん？」

それまでシートにくるまって震えていたオンナが、まるで蛇のよ
うに由忠にからみついた。

「い、いや、由紀子！誤解だ！息子のイタズラだ！」

「悠理君でしたね？」

「は……はい」

よく見れば、びっくりするくらいの美人だ。

その美人が、水瀬がビビるくらいの声色で言った。

「お家に帰りなさい　ここから先は、教育上問題です」

「は……はい」

あまりの迫力に押された水瀬は、バカのように首を縦に振るだけだ。

「ゆ、悠理っ！何とかしろっ！」

「お母さんと警察、どっちがいい？」

「どっちもいらんっ！」

「じゃ、樟葉さん」

「殺すぞ！」

「じゃ、どうしようもない」

「こ、この！」

「由忠さんっ！」

「い、いやだから！」

「愛人の地位は受け入れます！でも、でもっ！私だって辛いんですよ！？日陰者と言われ、耐えに耐えて我慢して！でも、でもっ！」

水瀬の目の前で、妙齡の美女が由忠の頭をわしづかみにした。

「せめて、せめてもの救いだと信じていたのに！け、決して！決して、二股はかけないという約束を忘れたの！？」

ギリ……メリ……メリ……

由忠の頭のあたりから奇妙な音が聞こえ始めた。

「お、落ちて着け室町警視正っ！警視庁のキャリアが　ぐあっ！」

「そんなに！」

後ろで束ねられた長い黒髪が巨大なツノのように逆立った。

「迷宮入り事件の犠牲者になりたかったなら、もっと早くおっしやっていただけばよろしかったのっ！！」

ぐがあああっ

メリメリメリ……ッ

そろそろ、限界を迎えるだろう父親の頭蓋骨の危機を前に、水瀬はペコリと頭を下げ、

「失礼しまあす」

そう言い残して、ベランダから姿を消した。

父親の悲鳴なんて、今の水瀬にとっては知ったことではない。

割れた窓からいろんな家具が飛んできて、パンツ一丁の由忠がベランダでクッションを楯に必死の説得を試みていようとも。

二股をかけられたことにキレたオンナが、包丁を台所から持ち出して、全裸のままベランダで由忠を刺し殺そうとしても　　だ。
それが、この父子の関係だった。

……

合掌。

第六話「親子」

喫茶 南風

「で、何が判ったの？」

「いろいろよ」

理沙は、不機嫌そうに空になったコーヒークップをソーサーに置いた。

妙にげんなりした顔をしている。

「何も食べないの？」

「……食べられないのよ」

「？」

「食べようとしても……いろいろ思い出しちゃってさ」

「そういうもの？」

「断っておくけど」

理沙はバッグから資料を取り出しながら言った。

「私も年頃の女なんですからね」

「……」

「……」

「……」

「何、ポケットとしてんのよ」

「……え？」

「えっ？て、何よ」

「ごめんなさいお姉さん」

水瀬は突然、両手をあわせた。

「？」

「お姉さんが女だってことをね？完璧に忘れてた」

「……」

「続けていい？」

未だに硝煙を吐き続ける拳銃から空薬莖を抜き取る理沙の目の前では、水瀬が泣いていた。

理沙も拳銃で撃つだけでは飽き足らなかつたらしい。

水瀬の頭には、銃尻で殴られて出来たでっかいタンコブが5つ、山を作っていた。

「……………ぐすつ……………はい」

「あの手首だけど、20代女性のモノだそうよ」
「若い女？」

「ええ……………大体、今から200年から300年前のもの」
「古いね」

「どこかの発掘現場から盗んでもきたのかしらね」

「日本で……………ミイラ？」

水瀬は首を傾げた。

ミイラといえば、エジプトや南米くらいしか思いつかないのだ。

「ミイラの輸入なんて出来るの？」

「ダメでしょう？でも、日本でもミイラに近い、肉が残った死体は出るの。検証した大学のセンセに教わったけど……………」

理沙は顔をしかめながら言った。

「意外と知られていないけどね？日本全国、何百年前の死体が残っていることはザラなのよ」

「へえ？」

「土壌とか、いろいろな条件が重なった結果らしいけど」

「ミイラで？」

「多いのは死蝋しろうの方。でね？例えば、脳みそとかかなり綺麗に残っているのよ」

死蝋とは、ミイラと並ぶ永久死体の一種。

死体が何らかの理由で腐敗を免れ、死体内部の脂肪が変性し死体全体が蠟状（もしくはチーズ状）になったものである。

「死し蟻いつていえば、八やっ墓は村むらだっけ？あれでも」

「そう。最も有名所ではイタリア、カプチン・フランシスコ修道会
のロザリア・ロンバルド……日本では福沢諭吉ね」

「あの一万円札が？」

「……もう少し、表現があるでしょう？……うつつ。思い出しちや
った……参ったわ」

「お姉さん」

水瀬は理沙が全く食事をとらない理由に見当がついた。

「その、死蟻しつてヤツ、見ちゃったんだ」

「……そうなのよお……」

理沙はテーブルの上につつぶした。

「面白そうだって保管庫に連れて行ってもらったら……真まっ白しろな脳
みそが……ヘンな色した死体……ホルマリンのプールにプカプカ

……あの男が天保年間、あっちが慶長年間の死体ですよ……だって」

「……歴史的なモルグだね」

「新人時代に老人の孤独死の現場入って以来よ……あの臭い……あ
の肌の色……うつつ」

うえっ。と声をあげた理沙は口元を抑え、ウェイトレスの持つて
きたコーヒーのお代わりを一気に飲み干した。

「……僕も、死体はいろいろみているけど」

ソファアの背もたれにもたれかかり、吐き気と闘う理沙を見なが
ら、水瀬は言った。

「アレは、慣れない人は絶対慣れないだろうことはわかるよ？」

「……私はダメね」

理沙は自嘲気味に口元を緩めた。

「でも、それでいいと思う。警官としての仕事とは別だと思っか
ら」

「……うん」

水瀬は笑って言った。

「腐乱死体の話、平気で語るようじゃ、お姉さん本気でもらい手な
くなるもんね」

「……そうね」

どこかひっかかるものを感じながら、理沙は小さく頷いた。

「それと、桜井すみれさんの件だけ」

「誰？」

「桜井すみれさん」

「そんな人、今まで登場していたっけ？」

「どういう表現よ。美奈子ちゃんのお母さんのことよ」

「……」

水瀬は、美奈子の母の容姿を思い浮かべ、

「名前と外見が一致しない」

「失礼なこと言わないの！」

と、理沙に怒られた。

「今じゃすみれどころか、カボチャみたいな典型的なオバさんだけ
ど」

「お姉さんも十分失礼だよ」

「……すみれさんのこと、ここでは“お母さん”って呼んでいい？」

「その方がありがたい」

「ミイラの手首については、お母さんにも心当たりはないそうよ。

おばあさんの美那さんもないだろうって」

「そうそう」

ポンツ。と、水瀬は手を叩いた。

「おばあさんって、どんな人だったの？」

「調べたけど、普通の人生。学校出てすぐに美奈子ちゃんのおじい
さんと結婚。一人娘のすみれさんを設けた……あとは昔の専業主婦
の典型的人生って言えば事足りる」

「……そんな人に、どうしてあんなモノを」

「名指したもんねえ」

理沙はちらりと水瀬を見た。

「……どうするの？」

「とりあえず」

水瀬は言った。

「相手の動きを見る」

「動き？」

「あれがどういう意味なのか。単なる嫌がらせか、それとも桜井さんに対する挑戦か」

水瀬は席を立った。

「警備してくれているんでしょう？動きがあったら教えてね？」

「うん……わかった」

何故か、水瀬は小走りにドアに向かった。

その後ろ姿を見送った理沙は、テーブルに残された伝票に気づいた時は遅かった。

「クソガキいつ！金払ってけえっ！」

そんな水瀬が、父親に呼び出されたのは、夕方の買い出しの最中だった。

「忙しい」

携帯電話に一言、そう告げると、無視を決め込んだ。

内容なんて知らない。

どうせロクなことじゃないだろう。

そう思っただけ水瀬は携帯電話の電源を切ろうとした時だ。新しい着信があった。

美奈子からだった。

先日の事件のこともある。

水瀬はすぐに電話をとった。

「もしもし？」

その電話で、美奈子は意外なことを水瀬に頼んできた。

曰く

「一晩、泊めて欲しい。」

「どうしたの？」

ポストンバッグを手にした美奈子が水瀬邸にやって来たのは、それからきっかり1時間後のことだった。

「ご、ごめんね？」

美奈子は、心底申し訳ない。という顔で玄関に立っていた。

ドアを開き、水瀬は美奈子を家へ入れた。

「親戚に不幸があつて、お母さん、しばらく帰れないって」

「お父さんは……」

そこまで言つて、水瀬は黙った。

「そう」

美奈子は頷いた。

「九州へ単身赴任中」

「それで僕の所へ？」

「葉月に親戚がいなくて、友達の所へって……」

美奈子が困つたような顔になった。

「……迷惑、だった？」

「ううん？」

水瀬は言った。

「そろそろルシフェルも帰ってくるし、問題ないよ」

「そっか」

心底、ホツとした顔の美奈子が、嬉しそうに言った。

「お世話になります」

事態が変わったのは、夕食を終えた頃だった。

「はあい」

チャイムの音を聞いて、何も考えずに玄関に出た水瀬は、目の前に立つのが父親だと判った途端、

ピシャンッ！

即座に玄関のドアを閉じた。

「どういう意味だ貴様っ！」

ドアの向こうで父親の怒鳴り声がする。

「鍵をかけるな！何だ今のゴトツて音は！？貴様、つかえ棒しているだろっ！ドアを釘で打ち付けるな！……暗くなった？照明まで消すな悠理っ！」

「今、この家は留守です」

「ぶち破るぞ！」

由忠がドアを蹴飛ばした。

「息子の前でそのような振る舞いは、教育上問題が」

「親を閉め出すのが息子の振るまいか！」

さらに怒鳴ろうとした由忠は、“待てよ？”という顔になった。

「悠理」

「……僕はいません」

「お前、まさか女、引っ張り込んでいるんじゃないだろうっな！？」

その声は、心底勝ち誇ったような声色をしていた。

「僕は留守です」

「綾乃ちゃんに通報するぞ！」

「……どうぞ」

「いい度胸だ！」

「ようこそいらっしやいました。お父様」

「そういうことなら」

水瀬邸の茶の間。

ちゃぶ台に向かい合わせに由忠と水瀬、そして美奈子が座る。

由忠　この場合、好きな男の子の父親　と初めて出会った美奈子は、しきりに緊張していた。

「最初から理由を言えばいいものを」

由忠はあきれ顔で息子に言った。

「何を一々怖れる？」

「……だって」

水瀬は不満げに口を尖らせた。

「……その」

「……ああ」

由忠は苦笑しつつ携帯電話を取り出した。

「例えば」

カシャッ

そんな音がして、携帯のフラッシュユが光った。

「こうして……こうだよな？……俺が、お前と美奈子ちゃんのツィショットを撮って」

ピピッ

随分不器用な様子で、由忠は携帯を操作する。

「……そして、綾乃ちゃんに送りつけるようなマネでもしないか心配だった……というんだろっ？」

「ち……違うよ」

水瀬は、横に座った美奈子をチラリと見て言った。

「桜井さんが迷惑するから」

「何を言うか」

由忠は携帯を操作しながら言った。

「クラスメートだろうが」

「う……うん」

「保育園からこの方、お前の友達っていうのを、俺は初めて紹介された気がするぞ？」

「……」

「大体」

由忠は携帯から目を離さずに言った。

「おかしいな。これでメールはどう操作するんだ？」

「あ……あの」

美奈子が席を立つと、由忠の携帯を覗き込んだ。

「アドレスは打ち込んでありますよね？じゃ、ここのボタンを押して」

「ああ……これで送れるのか」

メール送信中の画面を見て、由忠は心底感心した。という表情になつた。

「ありがとう。息子も私も、こういう方面はどうにもダメだ」

「いえ……恐縮です」

美奈子にはにかんだような笑顔を浮かべ、小さく頭を下げた。

「いい子じゃないか……どうした悠理？」

美奈子が見ると、水瀬は真っ青になっていた。

「……水瀬君？」

「あの……」

水瀬は恐る恐る、という表情で指さしたのは由忠の携帯だ。

「お父さん？今、誰に、どんなメール送ったの？」

「文章は書いていないぞ？」

由忠は答えた。

「単に、写真付きメールというのを送るのにはどうしたらいいか。そう思つて……」

由忠も、“ハッ！”という顔になって自分の携帯に視線を向けた。
“やってしまった”という言葉が、これほど似合う顔も珍しいだ
ろう。

美奈子は、水瀬親子二人の表情を見てそう思った。

ピンポン（チャイムの音）

ガチャ（ドアの鍵の音）

バキッ！（ドアが壊された音）

ドスドス（廊下を歩く音）

ガラッ！（襖が開かれた音）

「悠理君？」

ギギギギ……ッ

油が切れたようなゼンマイ人形のような音を立てながら、背後か
らの声に水瀬が振り返る。

そこには、百万人のファンを魅了して止まないトップアイドル、
瀬戸綾乃がにっこりと微笑んでいた。

「この写真」

微笑みながら、水瀬の前に突き出したのは、綾乃の携帯。

その画面には、美奈子と水瀬のツーショットが映し出されていた。
「どういうことか」

とっさにテレポートで逃げ出そうとした水瀬だったが、
グイッ！

神速の動きを見せた綾乃が、テレポートを始めた水瀬の右足を掴
むと、襖に叩き付けた。

水瀬はテレポートに失敗し、上半身で襖を破った。

その水瀬を襖から引きはがしながら、なおも綾乃は笑顔で携帯を掴んだままだ。

「説明してくださいね？悠理君？」

第七話「指輪の意味」

「お茶をいれようか」

由忠が急須に手を伸ばした。

「い、いえっ！」

美奈子が慌ててその手を止める。

「わ、私がやりますからっ！」

襖の向こうから、

グシヤッ！

ボクッ！

メキヨッ！

……凡そ人体から聞こえてはいけない音が、瀬戸綾乃の罵声と、水瀬の命乞いの混じって聞こえてくる。

「聞き慣れないかな？」

「い、いえ」

由忠の問いかけに、美奈子とはつさに答えてしまい、慌てて口元を抑えた。

「普段からあだからね。あの子にも困ったものだ

ん？」

不意に、由忠の視線が止まった。

視線の先にあるのは、急須を握る美奈子の手だ。

「……」

「……あの？」

「……いや。何でもない」

そう言いつつ、由忠の視線はずっと美奈子の手に注がれる。

「あっ！」

由忠の湯飲みに茶を注ぎ終えた美奈子は、自分の手元を見て、由忠の視線の意味を知った。

左手の薬指に光るのは銀色の指輪。
飾り気も何もないが、それでも今の美奈子にとっては、大切なものだ。

深い意味はない。

頭ではわかっている。

女の子として期待する意味は、この指輪にはない。

それでも、

それでも、

好きな人にもらった。

それだけで、美奈子にとっては大切な指輪なのだ。

「じ……これは」

どうしよう。

美奈子は困惑気味に手を隠そうとした。

私にとっては大切だ。

だけど、“悠理君にもらいました”と言ったら、父親としてどう思う？

本来の意味にしか捉えないだろう。

それでいいの？

自分からの問いかけに、答えることが出来ない。

単なるプレゼントです。
オモチャです。

そう言いたいのか？
そう言われたいの？

そんな、自分からの問いかけに、答えられない。

追跡装置に反応する機能が仕込まれてるんだ。

あれは、単なる照れ隠しだ。
本当は、ちゃんと指輪に意味を込めてくれているんだ。

美奈子は心のどこかで、そう願っている。

水瀬君は、私のことを

そう、信じている。

それを、口に出すことで、誰かに否定されることを、美奈子は心から怖れる。

「……………悠理か？」

「……………えっ？」

思わず見た由忠の顔は、心がとろけそうになるほど、優しさに包まれていた。

「その指輪だよ」

「……………」

「その指輪はね？」

何を外に逃げようとしてるんです！

吹き飛ばされたフリしても許しませんからね！？

「……………」

どうやら庭に放り投げられた水瀬を追って、綾乃も外に出たようだ。

ハアツ。

それを確認し、小さいため息をついた由忠が小声で言った。

「綾乃ちゃんには内緒にして欲しい」

「……………」

「それは…………お袋から悠理に与えられた指輪だ」

「これですか？」

「返せとはいわないさ」

困惑する美奈子の表情に、由忠は苦笑した。

「あいつも忘れていいのか何なのか…………あの性格だからね」

「……………ははっ」

やっぱり。

愛想笑いを浮かべながら、美奈子は内心で泣いた。

これは、オモチャだったんだ。

水瀬君が私にくれた理由は……………やっぱり……………。

「あなたにとって、一番大切な人にあげなさい。お袋はそう言っ
てあいつにくれた代物さ」

「縁日か何かですか？」

上手く笑うことが出来たかどうか、自信がない。

「まさか」

由忠は大げさなほどに肩をすくめた。

「普通の銀なら、あいつと俺は触ることが出来ない。そいつは天界の最高級ミスリルで作られた代物　　恥ずかしい話だが」

由忠は頭を掻いた。

「俺が妻に送った婚約指輪とは対になる代物だ」

「えっ？」

「まあ……あいつが、“そこまで”の意味を込めているか？そう聞かれれば首を傾げるしかない。“一番大切な存在”が、恋人ではなく、一番のクラスメートなのかもしれないからね」

「……あっ」

「そう落ち込まないでくれ。物事は、悪い方へと考えると、悪い方へと向かうぞ？」

「……はい」

「……物好きな話だとは思うが」

無然として湯飲みに口を付けた由忠は、ずっと立ち上がった。

「ここを動かないで欲しい」

その手には、いつ、どこに隠していたのか、一振りの刀が握られていた。

「悠理は……使い物にならないな。あのバカ息子め」

由忠が庭に面した襖に向け、一步を踏み出した途端

バンッ！

突然、襖がけたたましい音と共に開かれ、何かが部屋に飛び込んできた。

黒い大きな塊。

美奈子には、そうとしか捉えることが出来なかった　　それ。

ザンッ！！

グチャッ！

バンッ！

そんな音がして、室内に鉄のような臭いが漂い始める。

血の臭いだ。

「　　っ！！」

由忠の背後。

別な部屋に通じる襖。

それまで白地に水墨画が描かれた質素だが品のいい印象を受けていたその襖は、二つの真っ赤な、そして大きな染みによって汚されていた。

そして、襖の下には二つの黒い物体が転がっている。

黒い物体は、襖と床とに描かれた赤い線で繋がっている。

人間の死体だ。

「女子供も見るモノではないが……」

「お気遣い、感謝します」

美奈子は震える声で気丈に答えた。

「でも　私は大丈夫です。どうぞ心おきなく戦ってください」

ふっ。

由忠は楽しげに鼻を鳴らした。

「悠理にはもったいないな」

ズダダッ！

大きく開かれた襖。

その先に広がる闇の中から鈍い音が連続して響く。

美奈子はとっさに畳の上に伏せた。

「騎士に銃が効くと　」

由忠は全く動いてさえないなかった。

「本気で思っているバカがまだいたとはな」

ザンッ

ザシユッ

時代劇の殺陣で聞こえそうな音が、闇の中から聞こえてきた。

間を開けて、月を隠していた雲が動いた。
少しずつ、庭を月明かりが照らし始める。

月明かりに誘われるように闇の中から出てきたのは、黒髪の美少

女　ルシフェルだ。

その手には、由忠同様、抜き身の刀が握られている。

「遅くなりました」

刀を仕舞いながら、ルシフェルは養父である由忠に頭を下げた。

そんな仕草でさえ、銀色の月明かりに照らし出され、まるで一枚の絵画のような美しさとなっている。

「かまわない。ご苦労だった」

「不審者と見なし、とっさに斬りましたけど」

ルシフェルはその時、初めて美奈子の存在に気づいたらしい。

少し、驚いた表情を見せた。

「お父様？これは一体　？」

「さて？俺がわかることと言えば、」

由忠は肩をすくめた。

「これから忙しくなりそうだ。その程度さ」

第八話「死体安置室にて」

「悪いわね」

翌日、水瀬は理沙に呼び出された。

呼び出された場所は警察病院。

しかも死体安置室だ。

「それにしても」

理沙は安置室のドアを開く手をとめた。

「どうしたの？それ」

「……いろいろあります」

悲しげにそう答える水瀬は全身包帯とギプスだらけだ。

死体よりも死体らしい。

理沙は本当にそう思った。

「彼女と修羅場にしても派手すぎるわよ？」

「……うつつ」

「本当みたいね……はいはい泣かないの」

「グスツ、それで？」

「今回のホトケさんは」

理沙に促された水瀬は、安置室に入った。

薄暗い照明しかない上に、空気がよどんで線香の臭いでもなければ気が狂いそうな、そんな部屋。

普通の神経の持ち主なら、入ることさえ躊躇って当然の場所だ。

白い布がかけられた寝台が一つ、置かれている。

香炉に立てられた線香から白い煙が上がっている。

水瀬は軽く手を合わせた。

「ホトケ様の名前は」

理沙は、開きかけたバインダーを脇に挟んだ。

「まだ言わなくて良いわ」

「？」

水瀬は怪訝そうな顔で理沙を見た。

「まず、死体を調べて、意見を聞かせて」

「外見だけでいい？」

「……」

検分を終えた水瀬は、死体に白い布をかけ、再び手を合わせた。

死体は30代の女性。

死に顔に苦悶の表情がなかったのが唯一の救いだ。

「どう？」

「どう……って」

水瀬は困惑した様子で、何度も首を傾げた。

「この人、どうしたの？」

「何が？」

「……内臓ってどうか」

水瀬は、白い布をかけられた死体に視線を送りながら言った。

「お腹の中で何かが爆発したみたいな裂け方してる」

「死因は失血死」

理沙は死体から視線を外さずに答えた。

「検死の結果も、内部からの何らかの圧力による内臓器の破裂が認められている」

「……腸で？」

「子宮がね……跡形もないって」

「……オモチャでも入れたの？」

「どこの世界に爆発するようなのがあるのよ」

「世の中、いろいろいるから」

「……本気でそう思っている？」

その質問に、水瀬は黙った。

「そんな馬鹿げた死に方したマヌケを見せるために、私が水瀬君を

「……」

「……僕が異常だと思つのは」

水瀬は言葉を選びながら言った。

「死体の損傷もだけど……」

「死体そのものの状況なんだよ」

「？」

理沙は、表情を変えずに、じつと水瀬を見た。

その視線に促されるように、水瀬は言葉を続けた。

「子宮付近に、魔力が発動した痕跡がある……信じられない」

「どう？」

「どう作用したらこうなるか、まるでわかんないけど」

水瀬はしきりに首を傾げる。

「かなり強力……としか言い様がない」

「それと？」

「魂が崩壊している」

「崩壊？」

「強い魔力に接する場合、もしくは強い魔力を持つ者に憑依されるなどして、魂がその強い魔力と融合もしくは同調した際、魔力に負けて吸収されたり、破壊されることがある。その典型的現象になっている」

「お葬式、あげるだけ無駄じゃないの？それって」

「魂の救済がお葬式っていうなら、そう」

水瀬は頷いた。

「死後3日くらいは経っているけど？」

「ええ」

理沙は頷いた。

「死亡推定時刻は3日前の午前2時頃。死体発見は同日午前10時過ぎ。死体は白装束を着用した状態で、自宅付近のベンチに横たえられていた」

「……」

「何が起きたの？」

「私が知りたいわよ」

「どんな実験したのかな。それとも儀式？」

「だから」

ヘンな質問をする水瀬に、理沙はあきれ顔だ。

「肝心のこと、聞き忘れていた」

水瀬は死体から離れ、安置室から出ようとして、思い出したようにドアの前で止まると、くるりと振り向いた。

「この人、誰？」

「やっと話させてもらえそうね」

理沙はようやくバイナダーを開いた。

「やまなか・みちこ 山中美智子。年齢25歳。職業会社員。ENC社葉月支店の経理課勤務。結婚歴有。夫ははつき・ただお葉月忠夫SLC社葉月支局勤務。夫婦仲は良好」

「……」

「山中美智子は6日前の21時に退社したのを最後に失踪、家族から搜索願が出ていた。死体発見は自宅付近でよかったんだけど」

理沙は肩をすくめた。

「夫婦共に大企業勤務でしょ？事件になってもらっては困るってわけいろいろとあったのよ」

「？」

「まず、不審な死に方してる以上、警察に届け出る必要があるのに、それをしていない」

「……うん」

「知り合いの医者に偽の死亡診断書かせて、火葬届けも出したんだけど」

「……へ？」

「所が、ホトケさんが見つかった所を、近所のうるさいバアさんが見ていたのよ。で、このバアさん。警察へご注進してくださったワケ」

「…………へえ？」

「警察も一応、事情聞いたら死因から何から支離滅裂。素人がどんなに頑張っても、プロならわかるのよ。」

ほら。病院以外、自宅でさえ、少しでも不審な死に方した場合、警察に届け出る義務があるんだけど、ダンナはそれを無視した。

それが立派な犯罪で、“これ以上やったらしよっ引くぞ！”って脅したら、全部白状してくれた。

警察が死体抑えた現場がね？お通夜の真っ最中。

もう大騒ぎになったそうよ？

参列した人達、みんな急病で死んだと思っていたら、他殺の可能性があるなんて言われたもんだから」

「…………葬儀屋さんもお気の毒に」

水瀬はそこで、理沙に訪ねた。

「旧姓は桜井？」

「大正解」

理沙は満足げに微笑んだ。

「水瀬君はこういう方面には頭の回転が速くて助かるわ」

「昨晚は、僕がお相手出来なくて悪かったね」

「いいわよ」

「…………」

「…………」

理沙の動きが、止まった。

「私、何かへんなこと言った？」

「昨晚…………誰に相手してもらったの？」

理沙の手が動いたのは、その瞬間だった。

懐に突っ込まれた手が抜かれた。

そう思った次の瞬間

水瀬を、何かが襲った。

ただの弾丸ではない。

「？」

展開した魔法防御壁に突き刺さったのは、無数の短い針。

「これ たんしんじゅう 短針銃？」

超硬質の針を大量に、高速で撃ち出すため、金属でもボロボロにすることができると恐るべき代物。

無論、その殺傷能力の高さと、非人道性、超至近距離にのみ有効という、使い勝手の悪さから、正規部隊で使用される代物ではない。まして警察官である理沙が使うことはありえない。

「どこの誰か、聞いておく必要があるそうだね」

「ば、馬鹿なっ！」

理沙は目を見開いて水瀬を見ていた。

「魔力防御でどうして!？」

「対魔力加工でもしてあった？」

水瀬は楽しげに口元を緩めた。

その途端、

ジュッ

小さな音を立て、防壁に突き刺さっていた針が蒸発して消えた。

「なっ」

「おあいにくさま」

愕然とする理沙に、水瀬は心底楽しげに微笑む。

「さて……いろいろ喋ってもらってからね？」

水瀬の魔法が理沙を襲ったのは、その直後だった。

第九話 「美奈子の推理」

朝 水瀬邸

時間を少し戻す。

水瀬家の朝食が終わった席。

ルシフェルが作ったご飯に味噌汁、目玉焼きと焼き鮭という、日本の伝統的な朝食が食卓を飾る。

世界最強級の二人が近くにいることに安心したのか、無性にお腹の空いた美奈子は、気が付くと大盛りご飯を2回、おかわりしていた。

好きな男の子の父親と姉の前で食べまくったことによようやく気づいたのは、茶碗を置いた後だった。

一瞬、戻せば何とかなるか、とんでもないことを思いついたが、実践することだけはやめておいた。

「それだけ食べることが出来れば、大丈夫だ」

茶碗一杯をゆつくりと済ませた由忠は、満足げに頷いた。

「見事な食べっぷりだ。安心したぞ」

「き……恐縮です」

言われた美奈子は、赤面して小さくなるしかない。

「お義父様」

そんな美奈子をチラと見て、クスリと笑ったルシフェルが言った。食事を終えた由忠に茶を出したり、食器を片づけたりと、その手が止まることはない。

制服の上に割烹着姿のルシフェルは、美奈子の目からみても何だか恐ろしく新鮮に思えてならない。

料理、本気で覚えようかな。

そう、思う。

そんな美奈子の視線に気づかないのか、ルシフェルは由忠に言った。

「病院が連絡がありました」

「死んだか」

「……どうしてそんなに嬉しそうな声、あげるんですか？」

「なんだ、生きているのか」

「“手の施しようがありません。今晚が峠です” って息子がお医者様に言われたら……」

「毎度毎度、祝杯を何度無駄にする気だ？あのバカは……で？一生寝たきりくらいの朗報はあるんだろうな」

「先程、退院しました」

「……ちつ。費用はあいつ持ちだろうな」

「当然です」

「ならいい」

「はい」

心底、水瀬が気の毒になった美奈子の前で、由忠が沢庵に楊枝を突き刺した。

「それと、水瀬君からですけど、警察からの依頼があって、病院にしばらく残るそうです」

「ん？」

「村田警部補　ご存じですよね」

「ああ……」

天井に視線をさまよわせる義父の顔を見て、ルシフェルが顔をしかめた。

「お義父様」

「ん？」

「理沙さんの、一体何を想像したんですか？」

「ん？顔とか階級とか、実績とか」

「……どうして、実績思い出して鼻の下が伸びたんですか」

「……」

由忠は、何もなかったかのように、口の辺りを手で覆った。

「悠理はその件について何か言っていたか？」

「検死を頼まれたとか」

「検死？」

由忠は怪訝そうな顔をした。

「誰か死んだのか？」

「山中なんとかという若い女性……私もその程度しか」

「山中美智子か？」

「えっ!？」

驚いた声をあげたのは美奈子だ。

「山中美智子って!」

「知っているのか？」

「親戚です。今、お母さんがお通夜に」

「25歳……自宅は台東区か」

「お義父様?どうしてそこまでご存じなんですか？」

「ここに書いてある」

由忠は、そう言って、手元に置いてあつた新聞を美奈子達に手渡した。

「不審死の妻を葬儀場へあきれた夫逮捕へ」

失踪した後、自宅付近で死体になつて発見された山中美智子さん(25)の遺体を、警察に届けることなく自然死と偽つた夫・山中忠夫容疑者が、日、警察により逮捕された。

「妻が不審な死に方をしたとなれば、社会的信頼に傷が付く」と、山中容疑者は妻の死を偽つた動機を説明している。警察が美智子さんの遺体を確保したのは葬儀場、すでに家族や職場関係者が参列し、僧侶による読経が挙げられている最中だったため、一時葬儀場は騒然となった。

この件については、死亡診断書を偽造したとして、知り合いの医師も事情聴取を受けており、警察は、容疑がかたまり次第立件する方針だ」

桜井邸

「参ったわよ」

美奈子の母は、疲れた様子で首を横に振った。

場所は美奈子の家のリビング。

美奈子の横にはルシフェルがいた。

「死因は心臓発作って聞かされていたのよ？美智子ちゃん健康そうだったのって、みんな首を傾げていたら、突然、警察が来て、他殺の可能性があるだの検死するだの」

美奈子の母はお茶を飲みながら続けた。

「最後にはダンナさんが逮捕されるでしょう？あれ、ダンナさんが殺したのかしら」

「それはわかんないけど……」

興味津々という顔をする母親に困惑気味の表情を浮かべる美奈子はルシフェルを見た。

「その美智子さんって、親戚か何か？」

「やだもっつ！」

美奈子の母は美奈子を叩く素振りをした。

「美智子ちゃんとは遊んだことあったでしょう？山梨にブドウ狩りに行ったの覚えてない？」

「いつの話？」

「あなたが2歳の時」

「覚えているわけないでしょう？」

「お母さんは覚えているわよ？」

「……その」

ルシフェルが口を開いた。

「美智子さんは、つまりは美奈子ちゃんのこと？」

「まあ、一言で言えば親戚ね」

美奈子の母は頷きながら答えた。

「勝年さん　　つまり、おばあちゃんの弟の血筋。」

「桜井さんって、親戚は多いんですか？」

「いえ？逆よ。勝一郎さん、つまり美智子さんのお父さんは3年前にガンで。お母さんは戦争で亡くなっているから、美智子さんも身寄りがないのよ」

「　　えっ？」

「正直」

美奈子の母は、首を傾げながら言った。

「桜井家っていうのは、本当に細かい家系でね？びっくりするくらい親類縁者はいないの。最近はお葬式もこじんまりとやるらしいけど、それでもあの若さなら、親兄弟、親類集まればそこそこの数になるのが普通でしょう？」

「　　だけど、桜井家はそうはいかないのよ」

「　　どうして？」

「そりゃあなた。人がいないんだもの。今回のお通夜だって、会社と交友関係抜きにしたら誰もいないような感じで、お母さんが親族席の上座よ？……まあ、知っている限り、親類集まるとなれば、10人集まった覚えもないものね。あなただってそうでしょう？」

お母さんが小さい時からそう。

お父さんのお葬式の時、お母さんに聞いたものよ。“　　ウチはどうしてこんなに人が少ないの？”って」

「　　そしたら？」

「　　……おばあちゃんが亡くなる少し前に聞いた話だけ」

美奈子の母は、湯飲みにお茶を注ぎながら言った。

「桜井って姓は、明治に入ってから……もつと正確には、葉月市に来てから名乗った姓。それ以前のご先祖様がどんな姓を名乗っていた、どこに住んでいたのか。誰も知らないの」

「え？」

「サムライだったのか、農民だったのか……誰も知らない。それが私達桜井家のご先祖様」

「た、例えば」

美奈子は無い知恵絞って訊ねた。

「お寺とか。ほら、過去帳ってあるでしょう？」

「まあ無理ね」

美奈子の母は首を横に振った。

「明治維新でこの一帯焼け野原でしょう？うちが檀家になってる居菩寺だつてその後再建されているから」

「……過去帳が残っていない？」

「ルシフェルさん。その通り。明治維新で、あのお寺も一度、村ごと消えたから」

「……消えた？」

「そう」

頷いたのは美奈子だ。

「それまでの葉月は、単なる小さい漁村に過ぎなかった。漁村といつても、港といえる港もないようなところ。あるのは遠浅の海岸と砂浜だけ」

「……へえ？」

ルシフェルの知る葉月市は、軍需企業の工場が乱立する一大工業都市にして、世界的に知られた近衛軍の軍都だ。

半円形の深い港は大型船舶が常に出入りを繰り返して、上空を飛行艦が行き来する葉月市しかイメージ出来ないルシフェルには、この軍都が昔は長閑な漁村だったと言われても、ピンとこない。

「江戸城攻略を目指す新政府軍と、それを阻止したい幕府軍双方の魔法騎士達が激突したのがこの葉月村付近。一連の戦闘中に、原因不明の爆発が発生して、葉月村は消滅。当時、残っていた住民で助かった者はいない」

「……」

「何しろ、爆発のエネルギーは、遠浅の海岸をえぐり取ったくらいだもの。その結果生まれたのが、今の葉月湾」

「地形を変える程の爆発？」

「そう。爆風と熱線で両軍共に壊滅的な打撃を受けた両軍。特に江戸防衛を目指す幕府軍に与えた影響はかなりだったみたいね。江戸城無血開城は、この葉月湾の誕生と引き替えだったわけ」

「……成る程」

ルシフェルは頷いた。

「お寺の過去帳も、葉月市が出来てからしか残ってないでしょうしねえ……」

美奈子の母は、そう言つて肩をすくめた。

「美智子さんが亡くなれば、桜井の血筋は美奈子だけになるのねえ」

近衛軍某施設

「マルタ」が口を割りました」

入室してきた女性士官が、敬礼の後にそう言った。

マルタ　漢字変換すると“丸太”だ。

即ち、物言わぬモノ。

この女性士官が　いや、関係する者達が、その相手を人間扱いしていないことは、それだけでわかる。

口を割ったんじゃないくて、割らせたの間違いだろう。

それを聞いた由忠と水瀬は、その突っ込みだけはしなかった。

割らせるよう、命じたのは彼ら自身なのだ。

「フリーランスの何でも屋です」

「依頼主は？」

「ペーパーカンパニーです。“マルタ”自身が良いように利用され

ていたことになりす

「……そんな所だろう」

由忠はタバコを灰皿にねじ込んだ。

フリーランスの何でも屋に仕事を依頼する連中で、まともな者がいた例は、ためし由忠の生涯でも数えるほどしかない。

「ホンモノの村田警部補は？」

椅子の背もたれにもたれかかり、目を閉じて女性士官の話聞いていた水瀬は、目を開けずにそう訊ねた。

「警察病院内の駐車場に停車していたパトカーのトランクから発見されています」

「……そう」

「実行犯は水瀬少佐だと、村田警部補は見ているようですが」

「……後で否定しておく」

水瀬は目を開いた。

「……どう見る？お父さん」

「ここでは大佐と呼べ」

「……どう、見るの？」

「連中の狙いは間違はなく、あの美奈子という女の子だった」

由忠は息子に言った。

「部屋に強行突入、対象を拉致する。それが狙いだったが、相手が悪すぎたな」

「だからわかんないんだ」

水瀬は首を傾げた。

「何で？どうして桜井さんが狙われるのか」

「……確かに、怨恨の線は考えられないな」

由忠も、デスクの上に広げられた書類を眺めながら頷くしかない。

書類

それは全て、桜井美奈子に関する近衛の調査報告だ。

生年月日から過去の経歴といった月並みなものから、一体、どうやって調べたのか。それ自体が疑わしいほど、美奈子の人格に関わる重大な内容を書き連ねたものもある。

「この書類」

デスクに手を伸ばした水瀬は、興味なさそうに書類を片づけながら言った。

「言いたいことは、桜井さんが“シロ”だったことでしょうか？」

「……そうなるな」

「所でお父さん」

「ん？」

「桜井さんのスリーサイズをメモしていたけど、何するの？」

「お前は体重をメモしていたろう」

「……二人とも」

ゴホン

わざとらしい咳払いをした二人が、女性士官の視線から逃れるように会話を続ける。

「……書類上、“シロ”だ。では、事態が收拾出来ん」

「桜井さんが狙われる理由……」

「そう言えば悠理」

「何？」

「お前　前に面白いモノを見たと言っていたな。何でも、あの桜井美奈子に送られてきた荷物に入っていたという」

「？」

水瀬は、しばらく考えた後、ようやく思い出した。

「ミイラの手首のこと？」

「それだ」

「若い女の手首だけど」

水瀬は、父親に怪訝そうな顔をした。

「ミイラだよ？」

「……お前は俺に何をしろというんだ」

「……」

「……」

「……そう言えば」

水瀬はポンツと手を叩いた。

「宛先がヘンだった。桜井さんじゃなかったんだよね。あれ」

「ん？」

「桜井美那の子……そう、書かれていた」

「誰だ？それ」

第十話 「美奈子の推理2」

葉月警察署

「あんのクソガキ！」

ルシフェルを伴って警察に出向いた美奈子の前で理沙が額に青筋を立てていた。

パトカーから出た所で何者かに襲われ、パトカーのトランクに押し込められた。

理沙に言わせると、「清廉潔白の手本のようなこのワタシに、そんなマネするヤツは一人しかいない」となるが、主張自体に無理があるとした、美奈子には思えない。

ゴム手袋にマスクという格好で美奈子達に通されたのは、証拠品を保管しておく保管庫横の部屋。

証拠品を調べるための部屋で、普通は一般人が入れる所ではないという。

装飾も何もない、ガランとした中に、テーブルと椅子だけが置いてあるだけの、まるつきり取調室のような、殺風景な部屋に入ってくるなりの理沙の第一声がそれだ。

すっかり驚いた美奈子が、困惑気味に訊ねた。

「あ、あの……理沙さん？」

「ああ……ゴメン」

ゴム手袋をした手で小脇に箱を抱えた理沙が、片手で謝罪を示した。

「あなた達の事じゃないわ。あの（自主規制）のこと」

「……確かに」

「ルシフェルさん。仮にも弟なんですから」

「それでわかるあたり、あなた達もどうなのよ　はいこれ」

理沙は小脇に抱えていた箱をテーブルに置いた。

その中身を知っているだけに、理沙は気味悪そうな視線を箱に向

ける。

「こんなの……見てどうするの？」

「私だって見たくありません」

美奈子は苦笑しつつ答えた。

「でも、この中に、今回の事件の鍵が眠っている。私にはそう思えるんです。見て良いですか？」

「名探偵殿の挑戦に期待するわ　どうぞ？」

「……」

ミイラの手首そのものには、さすがに美奈子は手を触れなかった。ガラス板の上に置かれたミイラの手首を興味深そうに見ているのは、ルシフェルだ。

その横で、美奈子はミイラの手首が入っていた包みや箱を調べる。理沙はその前でぼんやりとしているだけだ。

「うーん」

手首を包んでいた綿まで調べたが何か目新しいモノは何も出なかった。

「何を知りたいの？」

理沙は頬杖を付きながら美奈子に訊ねた。

「何か……手がかりがあればって」

「そんなの」

理沙はフンツと鼻で笑った。

「警察が徹底的に調べたけど、何も出てないわ」

「……ですよね」

小さく笑う横では、ルシフェルが手を伸ばしてデスクライトを点灯しようとしている。

一つのこと熱中すると周りが見えなくなる。

弟の水瀬と恋人の博雅が揃って賞賛しつつも嘆くルシフェルの悪

癖だ。

美奈子の横で、デスクライトが点灯する。

横からの灯りを美奈子が認めたのは、郵便小包の包み紙を広げていた丁度その時。

「……」

包み紙には、

桜井美那の子

そう、書かれた万年筆の文字。

美奈子は、その文字に気を取られていた最中だった。

「どうしたの？」

じつ。と、宛名の文字を見続ける美奈子の様子に気づいたのは理沙だ。

ルシフェルはどこからか虫眼鏡まで取り出してミイラにかかりつきりだ。

「理沙さん」

美奈子は言った。

「筆跡鑑定の人、お願い出来ますか？」

「成る程？」

原則として現場保存、現場観察、資料の保全を職務とする一警察署の鑑識課は、筆跡の担当を行わない。

主に県警本部単位で設置される科学捜査研究所の仕事だ。

部外者である美奈子が知るはずもないことだが、それでも心得があるという人物が鑑識課にいてくれたことが美奈子には幸いした。

一時出向していた科学捜査研究所で、文書鑑定も経験したという鈴木という初老の男性が美奈子の話を聞いて頷いた。

その手には、美奈子から渡された包み紙がある。

「筆跡がおかしいというんだね？」

「はい。万年筆の文字ですが、筆運びが妙にぎこちないというか、これって、意図的なのか、それとも本来、こういう書き方する人なのか」

「……ふむ」

ごま塩頭を短く刈り込んだ頭を頷かせながら、日に焼けた赤ら顔をしかめ顔にする鈴木は、包み紙を凝視する。

「そうだね。指摘の通りだと思う。これは意図的だと見るべきだろうね。インクのにじみ具合からして、筆を動かすあちこちで躊躇するように筆を止めている。」

「何故でしょうか？」

「筆跡を隠すためか……」

鈴木は、ちらと美奈子を見た。

「どうしてだと思う？」

その目と表情は、あからさまに美奈子を試していた。

「……この内容で、筆跡を隠す必要がどこにあるかがわかりません」

「内容については何とも言えないが、キミでも私でも、村田警部補でも、似たような書き方をしたことがあると思うよ？」

「えっ？」

「人が文字を覚える中で、避けて通れないことがあるだろう」

「……」

美奈子はきよとん。とした顔をしたが、

「手本を真似た」

そう、言ったのは理沙だ。

「鈴木巡查部長。これはつまり」

「そう」

鈴木は頷いた。

「おそらく、誰かの書いた手本を見ながら書いたんだろうな」

「それってつまり」

「桜井美那の子……書かれている文字は難しくない」

鈴木はゆつたりとした声で、まるで諭すかのような口調になった。

「それでも、手本を必要としたとしたら、その理由は？」

「えっ？」

鈴木の問いかけに、理沙が眉をひそめた。

「巡查部長？そんなバカなことが」

「ある」

鈴木は力説するように頷いた。

「そうするしかないケースが、存在するんですよ」

「……」

「判るかな？名探偵殿。ついでに私からの情報だが、この万年筆の使い手は、万年筆の扱いに慣れていない。万年筆の筆圧から見て、腕力は弱く、繊細だ。そこから言えることは」

「……書いたのは女？」

「おそらくね。“の”の書き方というか、筆運びからして、筆記体を書き慣れた筆運びで無理矢理、日本語や漢字を書いたという印象

を私は受ける」

「つまり！」

美奈子は言った。

「これを書いたのはぬ」

「わかったようだね」

鈴木は嬉しそうに頷いた。

「これを書いたのは、日本語の記述になれていない、外国人の女性だ」

鈴木は自分の結論に満足そうに頷くと、包み紙を美奈子に返そうとして、手を止めた。

「……ああ、そうそう」

「はい？」

「宛先は本来、違ったみたいだね」

「……へ？」

「美那の子というところにはないんだが 見てご覧？」

鈴木は、美奈子に虫眼鏡を手渡しながら言った。

「桜井という文字の下に、鉛筆で書いたんだらう下書きの痕跡がある。本来、下書きに沿って文字を書こうとしたが、何らかの理由でそれが違ってしまった。鉛筆の下書きを消して、その上に別な手本に書かれた文字を見ながら、真似書きした。そんな所だらう」

「で」

美奈子はじれったそうに鈴木に尋ねた。

「何て書いてあったんですか？」

「かわちだよ」

「かわち？」

「河の内では河内。私にはそう読めるがね」

「……河内」

その日の夜 水瀬邸

「河内？」

ルシフェルの報告に、由忠の動きが止まった。

「河内と言ったのか？」

「はい」

由忠の前に立つルシフェルは頷いた。

「本来、犯人が送られたかった相手は、桜井美那の子ではなく、河内美那の子ではないかと」

「……桜井美奈子とその親に心当たりは？」

「全くないそうです」

「……」

「……」

由忠は、それからしばらく身じろぎ一つせず、何かを思い詰めたかのように考え込んでしまった。

「……まさかな」

ふっと、笑顔を浮かべたのは、それからかなりの時間が経ってからだ。

声をかけようか躊躇していたルシフェルがホッとした顔になる。

「ありえない……か」

「お義父様？」

「いや済まない。河内と言うので、まさかと思ってな」

「お心当たりが？」

「……ああ」

由忠の表情が曇った。

「幕末の頃の日本史は学んだか？」

「大凡の流れは」

ルシフェルは頷いた。

よもや美奈子經由で興味を持った新撰組や志士系のBL小説で得た知識だとは口には出せないが。

「うむ　幕末、日本で魔導師の双璧を成していたのが、まつぶえ・たかおみ松笛貴臣と」

「……その人と？」

「かわち・しくれ河内時雨という女性だ」

「……」

少なくとも、BL小説に出てきた名前ではなかったので、ルシフェルは首を傾げた。

その反応で、名前を知らないと判断した由忠は、フォローするかのように言った。

「判らなくて当然だ。普通、河内時雨の名は歴史の教科書にも出てこない、明治政府によって抹殺された名だからな」

「抹殺された？」

「まだ夜も早いから教えてやろう。河内時雨については、こんな伝説がある」

由忠は、語り出した。

幕末の闇にその人ありと謳われながら、歴史に名を止めることもなく消えた希代の女魔導師河内時雨の名が、唯一、公式の場で語られた現場で起きた世にも奇妙な出来事を　。

第十一話 「過去の悪夢」

事件発生より遡ること約百年前 東京日本橋 美術の白蛾堂

「ご存じでない方がいらつしやるとは存じませんでしたので」

ある夏の夜。

化物絵ばかり百点以上を集めた展覧会にあわせ、店の主が呼びかけた百物語の会の席上、飛び入りで壇上に登った小柄な老人がはげ上がって広い額を手ぬぐいでぬぐった。

盆提灯の弱い灯りが、歪に、しかも薄く映し出すのは、壇と向き合う聴衆達。

見る人が見れば、その中には名だたる文士や著名人が多数混ざっていることがすぐわかる。

皆、そういう人々の口から語られる怪談話を目当てで来ている。

飛び入り、しかも老人の話に興味はない。

それを承知の上で、老人は語り続ける。

「そうですね。そうかも知れませんが、かわち・しぐれ河内時雨なんてご存じないですよ。失礼いたしました。何しろ、関係者だと、自分のご先祖様が絡む人物は皆、世に知られていると思いきむものでして……」

皆、そんな老人の声を聞くともなしに弁当を口に運ぶ。

壇上の声より、蓮飯に芋幹という亡者向けの弁当の献立の方にこそ興味があるようだ。

「河内時雨は、名前の通り女性で、幕末を生きた人物です。

熱烈な勤王家でして、幼少の明治大帝の乳母を任じられたこともあります。」

かなりの美人としても知られていたそうです。

それで……

……それで、ですね？

ううむ。

……いや。

語るといふものは難しいですな。勢いでここまで登ったものですが、今になっては後悔さえしています。

さて……どこから話したものが……。

……

ああ、池田屋事件や寺田屋事件はみなさんご存じでしょう？
それと同じような事件が、やはり京の都であったのです。

紅屋事件……知らないですよね。

知っていたら、それこそ歴史通も歴史通だ。

……ははっ。申し訳ないですな。

紅屋事件とは、朝廷に対するクーデター未遂事件です。

その頃、河内時雨は、勤王の念強く、それ故に宮中を辞し、志士達の中へと身を投じていました」

一体、怪談なのか歴史の講釈なのか全くわからないような話が続

く。

短くまとめると、河内時雨とは、美貌と知識で知られた元女官上がりの勤王家で、京都に集まる志士達の間では、知る人ぞ知る人としてまで呼ばれるようになった人物だ。

美貌と知識、そして残忍さで。

その思想は苛烈で、敵対者は容赦しない。必ず残忍な方法で、しかも周囲への見せしめ同然のそれは非道い方法で殺す。

志士だろうが誰だろうが、彼女の意志にそぐわない者は、全て殺される。

それ故に周囲に次第に疎まれるようになった。

後に明治新政府を率いる者達が台頭する中、志士の間で急速に立場を失いつつあった彼女は、一部急進派の志士と共に、宮中に忍び込んで帝を誘拐、倒幕の軍を挙げようと企てたが、身内の裏切りにより、企てはすぐに露見した。

彼女の仕打ちを恨み、あるいは恐れた者達により、いわば売られたのだ。

そんなことは露ほども知らないまま、彼女は常宿にしていた紅屋で新撰組により拘束され、江戸へと送られることになった。

老人の話は、ここから段々とおかしくなってくる。

それまでの、岩から染み出すような淡々とした口調はなりを潜め、ポツリポツリとした口調になったただけではない。

恐ろしく話が下手になつたどころではなく、話にさえなつていない。

まるで言葉が一々喉に詰まるような、そんな様子で喋る。

皮肉なもので、話の順序も何もかもすべてを無視する格好が、逆に聴衆の興味を引いた。

老人の断片的な話を続ける。

河内時雨を江戸まで運ぶ任に就いたのは、京都にて金で雇われた浪士達。

彼女は彼らによつて街道から外れた場所に監禁された拳げ句、女としての生き地獄を味わうことになった。

拷問に等しい男達の鬨りの繰り返し。

最後には、酒に酔つた浪士達が鬨り者として切り刻まれて殺された。

高尾太夫の吊し斬りの方がまだ可愛げがあるほどの陰湿な方法により殺された河内時雨の亡骸の有様は、翌日、酔いの醒めた浪士達でさえ震え上がったほど。

その死体はそのまま米俵に押し込められ、近くの洞窟へと放り捨てられたという。

表面上は、逃走を企てたため、やむを得ず殺害したとして。

この話が怪談なのは、これから先。

この事件の後、浪士達は次々に奇怪な死に方をした。

河内時雨の怨霊のなせる技だと、話を知った人々は恐れを抱いた。

これだ。

……

……よくある古いタイプの怪談。

そういえばその程度の価値があるかどうかの程度。

何しろ話し方が支離滅裂すれすれである。思い出したことをただ口にしていくようにしか思えない。

ただ、不思議とそれが真実を産み出しているともいうのか、聞く者の心を掴むのも皮肉なことに事実だ。

それ故か、最初こそ問題にしなかった聴衆達も、知らず知らずに聞き耳を立てずにはいられなかった。

老人の口からポツリポツリと語られる河内時雨の怨念のみがなせる技としか言い様のない浪士達の死に様。

聴衆達は、いつの間にか弁当にのばした手を止めている。

そして

この話が、本当の怪談話であることを、聴衆達は目の当たりにすることになる。

「……こうして浪士最後の一人が亡くなりました。この時、河内時

雨は」

浪士達の死を一通り語りきった老人がしきりに額の汗をぬぐう。

「この時……河内時雨は」

汗を拭く手ぬぐいが老人の手から落ちた。

「この……時……かわ……れ……は」

弾に立った老人の足が、まるで崩れ落ちるように老人は壇上に倒れた。

「もしもし？」

驚いて壇上に登ったのは司会担当者。

彼に語りきった揺すられた老人はハツとして起きあがると、再び語り出した。

「この時、河内時雨は」

老人が語り出したのは、既に語った場面　つまり、河内時雨が自らの死を悟り、常人には計り知ることさえ出来ない怨嗟を込め、口を開く所だ。

そこはもう聞いた。そうは言いたいのだが、老人の様子を前に、聴衆からは野次さえ出ない。

不気味、不可思議、異常

虚ろにして血走ったような老人を表現する言葉を聴衆は既に失っていた。

「この時……河内時雨は……このと……かわ……れは」

老人の顔が蒼白になり、まるで壊れたレコードのように同じ言葉

を繰り返す。

さすがに聴衆達からもざわつきが起きる。

わざと同じ言葉を繰り返して我々を担いでいるのか？

それにしても、あの老人の様子は一体？

「かわ……は」

「もしもし？」

聴衆が騒ぎ出す以上、司会としても放つてはおけない。

壇上になると、司会は老人の肩を揺すった。

「それからどうしたんです？河内時雨はどうなったのです？」

返事がない。

司会はもう一度、怒鳴るように注意する。

「ちよつと、あなたね　えっ!？」

老人は、演壇にしがみつくようにして絶命していた。

老人の死は、当時の新聞によって世間の話題に登ったのは言うまでもない。

そしていつしか、誰が言い出したのか、世間には暗黙のルールのようなものができあがった。

曰く

河内時雨の話は呪われていると

第十二話 「由忠の結論」

「語っただけで……死んだ？」

ルシフェルが怪訝そうな顔で由忠に訊ねた。

「あり得るんですか？」

ルシフェル自身は、全く話を信じていない。

よしんば、現実の話だとしても、それは単なる偶然が重なった結果程度にしか思っていない。

「あり得ないことが起きたから、結論として“呪われている”という噂が出たんだ」

由忠はルシフェルの反応を楽しむかのように答えた。

「また、こんな話もある」

「我を過ぐれば憂ひの都あり、

我を過ぐれば永遠の苦患あり、

我を過ぐれば滅亡の民あり

義は尊きわが造り主を動かし、

聖なる威力、比類なき智慧、

第一の愛我を造れり

永遠の物のほか物として我よりさきに

造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、

汝等こゝに入るもの一切の望みを棄てよ。

わかるか？」

「ダンテの『神曲』地獄篇ですね」

「そうだ」

由忠は満足げに頷いた。

「よく知っておるな。よく勉強しているな」

「ありがとうございます……あの、それでルシフェルが訊ねた。」

「ダンテと河内時雨……どういう関係が？」

「河内時雨が死亡したとされる年から約20年後、先程の事件から数年後のことだが……河内時雨について調べていた歴史学者が一人ある人物を訪ねた」

「誰です？」

まつぶえ・たかおみ

「松笛貴臣」

幕末から明治にかけて最大最強と呼ばれた魔導師。

河内時雨とは双璧をなすことは、さつき教えた通りだ」

ルシフェルは無言で頷いた。

「私の知る限りだと、松笛と学者のやりとりはこうだ」

問う「河内時雨は、本当に浪士達の暴行により死んだのか」

答う「それでは不満かい？」

問う「違うのですか？」

答う「そう思うならそう思うといい」

そして、松笛は席を立つと、朗々とこの一節を口ずさんだという。

なおも意味がわからないと食い下がる学者に、松笛は言った。

彼女は門になったのだよ」

「いくらでも解釈出来る言葉ですね」

聞き終えたルシフェルは、首を傾げた。

「……門」

「松笛は謎の多い人物でな。少なくとも、河内時雨が京都で捕縛されたのと時期を同じくして姿を消している。上に大がつく魔導師である彼女であるから？彼女を殺した、或いは殺せたのは、彼だけだというのが定説なんだ」

「本人は否定しているんですか？」

ルシフェルはもつともらしいことを訊ねたが、由忠は首を横に振った。

「先程の問答しか記録が残っていないから何ともわからん」

「……成る程？それで」

ルシフェルは首を傾げた。

「……お義父様は、伝説を信じているのですか？河内時雨の話は呪われているって」

「伝説と言えば伝説だが」

「……あの」

義父が顔を曇らせたことに娘としてイヤな予感を感じたルシフェルは訊ねた。

「まさか、伝説じゃなくて、事実なのですか？」

「河内時雨の死については、正直、俺も詳しいことは知らない。詳しいのはむしろお袋だろう」

「御婆様が？」

「ああ。俺は河内時雨のことに関わるなどお袋から言われた」

由忠はコーヒーを飲み干した。

「小学生の夏のことだ。河内時雨の記事を、何かで読んでな？興味があったのでお袋に聞いたんだが “あなたを関わらせる訳にはいきません” と言われた。お袋からそう言われたのは、それが最初で最後だ」

「関わることを許さない？水瀬家当主として？」

「それだけ、厄介な話だということさ」

由忠はコーヒーカップを娘に渡した。

ルシフェルは、脇に置いてあったコーヒーメーカーからいれたてのコーヒーをカップに注いだ。

「よく考えて見る。河内時雨が勤王家だというのは建前というか、一般的な知識に過ぎない」

「はい」

ルシフェルは頷いた。

「しかし現実には、幕末の大魔導師」

「そう。では聞くが、それがどうしてこうも世論の話題に上ってこないと思う？」

「……え？」

ルシフェルは、父親からの突然の質問にすっかり面食らった。

「だ、だから、タブーだから」

「そう」 由忠は頷いた。

「河内時雨の話題そのものに、触れること自体がタブー視されているんだ。総じて言えば、河内時雨と言えば、幕末史のタブーの代名詞だ」

「……どうして？」

「そう考えること自体がタブーなのさ」

「答えになっていない」

「……その答えを、少なくともお袋は知ってるんだ」

由忠は、渡されたコーヒーカップから昇る香りを楽しみながら言った。

「いいか？幕末にも派手に立ち振る舞い、葉月湾まで作り上げたわが一族の中でさえ、河内時雨については資料が残っていない。口伝さえお袋が断ったせいで伝わっていない。その意味を考えて見る」

「今、とんでもないこと聞いた気がしますが……絶対的なタブー？」

「そうだ」

由忠は頷いた。

「俺も個人的に調べたさ。結局、河内時雨を世に出そうとした者は、必ず不慮の死を遂げている。事故死、自殺、突然死」

「……消された？」

「そう見るべきだ」

「ふうん？」

「だからですか？」

「ん？」

「桜井さんの荷物に、河内って名前があったことが心配になったのは」

「そうだ」

「河内時雨って、子孫はいないのですか？そんな人なら、子孫の所になにか記録でも」

「そこまでは 知らんというか、」

由忠は顎の下をポリポリと掻いた。

「河内時雨で血筋は絶えたはずなのだ。もし、傍流もしくは、河内時雨の子孫が存在していたら」

「していたら？」

「とんでもないことだ」

「？」

「水瀬家と倉橋家……そして河内家は共に巫女の家系だ。同じ巫女でも、性格が違う。わが水瀬家や倉橋家は、別名「戦巫女」と畏怖された、バリバリの戦闘系だ。だが、河内家は違う」

「違う？」

「……生け贄の巫女だ」

「生け贄？」

「ああ……代々、といっても、正しくは数百年に一人の割合で生け贄を差し出す程度だったそうだ。今は本家が途絶えた今となっては、何にどんな儀式を経て生け贄を捧げていたか知る術はないがな」

「……まさか」

「俺が心配になった理由は」

由忠は真顔で言った。

「その、桜井美奈子が河内時雨の子孫だとしたら、相手の狙いが全部読めるからだ」

「……あつ！」

ルシフェルは真っ青になった。

「そ……そんな！」

「わかったようだな」

由忠は娘の聡明さに満足するかのように、感慨深げに頷いた。

「敵は、ミイラを送りつけることで、生け贄を求めた。そして、その生け贄として、河内時雨の子孫たる巫女として」

「……」

「桜井美奈子を指名したんだ」

第十三話 女の子の下心と男の子の事情

「災難だったね」

美奈子はそう言つと、そつと水瀬の前にコーヒーカップを出した。
「うん」

車のトランクに押し込められたと勘違いした理沙によってボコられた挙げ句、ようやく身の潔白を納得してもらつたばかりだった。顔には青あざや平手の後、ひっかき傷が走る。

「尋問と拷問の区別をつけて欲しいなあ……理沙さんって」

「カンカンだったものね」

いいつつ、美奈子は水瀬の顔を見て嘔き出した。

「笑い事じゃないよお」

恨み言を言う水瀬がコーヒーに口を付けた。

「……おいしい」

「よかつた」

その一言に、美奈子は嬉しそうな顔になった。

「インスタントだけどね」

「おいしいよ？」

水瀬は小さく微笑む。

そんな些細なことが、美奈子にとっては何より嬉しい。

……ただ。

「1909年7月、ダーバンからケープタウンに向け航行中に、200名を超える乗員乗客と共に消息を絶つた貨客船ワラタ号は、“オーストラリアのマリー・セレスト号”とも呼ばれ

ガランとした家の中。

テレビの音だけがやたらと大きく感じられる。

家の中にいるのは、自分と男の子だけ。

普段なら狭いとさえ感じる家が、妙に広い。

世界中に、自分達だけしかいないんじゃないかと、錯覚してしま
う。

のどが乾く。

心臓が妙にドキドキする。

普段、学校で一緒にいる時とは全く違う。

学校では服のことなんて、何も意識したことはないのに。

今は違う。

服じゃなくて、何故か下着のことが気になってしまう。

お風呂はどうしよう。

お風呂入ってもらって……それから……。

ふと、そんなことをとりとめもなく考えている自分に気づいて、
慌てて首を左右に振って、考えを振り払おうとする。

「……どうしたの？」

「え？」

水瀬に首を傾げられ、美奈子は慌てて笑って誤魔化そうとした。

「な、何かへんなの流れた？」

「……？」

水瀬は怪訝そうな顔になった。

「ずっと立ったままだし、すごく慌てている」

「や、やあねえ！」

美奈子は笑いながら言った。

「そ、そんなことないわよ！」

「ふうん？」

水瀬はそれでも言った。

「テレビ、一緒に見よう？」

「う、うん」

テレビの前に置かれたソファアに座った水瀬が、ポンポンと軽くソファアを叩く。

美奈子は、まるで地雷の上に座ろうとしているように、恐る恐る

水瀬の横に座ると、注意深く水瀬との距離をとろうとした。

「……あの」

水瀬は、困惑したように言った。

「僕、席、離れたほうがいい？」

「そ、そんなことないっ！」

美奈子は思わず出た大声に、自分で驚いた。

「い、いいのよ！？その場でデーモンとしていて！」

「そ、そう？」

水瀬は何とか話題を作ろうと話しかけた。

「お弁当、おいしかったね」

「う、うん」

言われた美奈子は泣きたくなった。

男の子と二人きりの食事だ。

未亜あたりなら、手作りの料理がテーブルを飾っているはずだ。

それに引き替え、水瀬が来ると聞いた途端に、コンビニ弁当をホカ弁に格上げするだけしか発想出来なかった自分が悲しすぎる。

何度も料理を学ぼうと思っても、そう思うのは後悔するその時だけで、後になればどうでもよくなってしまふ。

瀬戸綾乃は、アイドルとして忙しい中、いつも水瀬にお弁当を作ってくるし、水瀬はそれを楽しみにしている。

それをパンをかじりながら見ている自分が水瀬においしいと言ってもらえるのが、ホカ弁やインスタントコーヒーでは。

私は本当に、水瀬君に女の子として意識してもらえているんだらうか。

美奈子は、それが本気で不安になってきた。

ふと、水瀬の横顔を見る。

美奈子の横で、コーヒーを飲む水瀬は、料理番組に熱中している。視界に美奈子が入っている様子はない。

はあつ。

美奈子は小さくため息をつく、左手の薬指を見た。

本当なら世界中で一番輝くべき銀色の輝きが、なんだか冷たく感じられてしまう。

あなたにとって、一番大切な人。

婚約指輪とは対。

由忠の言葉が頭の中で何度も繰り返される。

水瀬君は、この指輪の由来を知っているの？

何度も、そんな言葉が脳裏を横切り、そして喉で消える。

その答えを知りたいような、知りたくないような複雑だった。

答えを知ること、水瀬との関係が進展すればいい。

二人きりの、今の時間と世界は、そのためにあるようなものだから

だけど、

拒まれたら？

自分の勘違い……いや、自意識過剰だと、この場で思い知らされたら？

それが　　怖い。

このままでいい。

このまま、友達でいよう。

水瀬君に拒まれた後、私は友達でいられる自信はない。

なら……。

そう思いつつ、体は異性としての水瀬を意識しつづけている。

水瀬君は、今のこの状況をどう思っているんだろう。

私との関係をどう思っているんだろう。

それが気になる。

……そんなことが次々と頭に浮かんでは、消えていく。

結局、友達という微妙なラインでダンスを踊る美奈子の周りで、じれったいような、それでいて、心地よいような、不思議な時間がゆっくりと過ぎていくだけ。

つまり

いつも通りだ。

ピンポン

不意に、チャイムが鳴ったのは、21時の時報が鳴った時だ。思わず、ビクツとなった美奈子は、席を立った。

「こんな時間に？」

水瀬は時計を見て怪訝そうな顔になった。

「未亜ちゃんかな？」

「まさか」

美奈子は言った。

「あの子は結構、そういう所、モラルがあるのよ？」

「ふうん？」

ピンポーン

ピンポーン

チャイムの音は続いている。

誰かが出るまで鳴らし続けるつもりだろう。

リビングから玄関に向かおうとした美奈子を止めたのは水瀬だ。

「……まっって」

「えっ？」

「僕、出るよ」

「で、でも」

「自分の立場、わかってね？」

「……あっ」

そう。

何故、水瀬がこの場にいるのか、それで思い出した。自分の護衛。

それなのに、ここで不用心な振る舞いをすれば……。

「ご、ごめんなさい」

美奈子は神妙な顔で謝った。

「でも……いいの？」

チャイムは未だに続いている。

「うん。ただ、桜井さんは、ここにいて？」
「う……うん」

水瀬はチャイムが鳴り続ける玄関で、ドアの前に立った。

「……」

そっと、ドアノブにのびしかけた手を止める。

「……」

恐る恐るという顔でリビングから顔を伸ばして水瀬の背中を見守る美奈子の耳に、ドアノブが回された音がした。

その途端。

バンッ！

その瞬間。

美奈子には、何が起こったかわからなかった。
目の前が真っ白になった。

とっさに目をつむったはずなのに目に何も映らない。

誰かが自分を抱きかかえたのはわかるが、それが誰なのかわからない。

ギインッ！

ギンッ！

ズンッ！

ガシヤアアンッ！！

何かが連続して壊れる音がする。

「ち、ちよっと!?!」

美奈子は見えない目のまま、慌てた様子で怒鳴った。

「い、今の、何の音!？」

「ごめんね?桜井さん」

すぐ近くで水瀬の声がした。

どうやら、抱きかかえているのは水瀬だと、それで美奈子は見当をつけた。

「窓ガラスとドア、後で弁償させるから」

「な、何?割れたの?」

「……割られた」

「それは言いがかりです」

きっぱりとした、それでいて優しげな女の声が美奈子の耳に入ったのは、その時だ。

まるでチヨコレートケーキを連想させる、甘い声。

「ドア越しに魔法矢を撃ち込まれたのはそちらでしょう?」

「ちがつ!」

「なっ!?!」

水瀬の慌てた声に、美奈子が血相を変えた。

美奈子の眼がようやく復活しつつある。

美奈子の眼に、ぼんやりと水瀬らしい人物の輪郭が映りだした。

「こちらのお家にアンロックご迷惑がかかってはと、私達はきちんとこちら窓マジック・ミサイルに対して、解除魔法で入ろうとしましたのに。そこにまで魔法矢を撃ち込まれたのは……」

クスクスと笑う声が後の声を消した。

「水瀬君っ!」

美奈子の手が水瀬の口を容赦なく引つ張った。

「私の家、何だと思ってるの!？」

「!、ごめんなひゃいっ!」

「修理費、全額負担してもらっからね!？」

「は、はいっ!」

「さて」

痛む眼を酷使して、美奈子はようやく、その声の主を見ることが出来た。

金髪の眼鏡をかけた、自分達よりやや年上の女性。

白いスーツ越しに見事なボデイルインがみてとれる。

優しい眼が、美奈子に微笑んでいる。

その美しさに、思わずポカンと見とれてしまう。

「お話はまとまりましたか？」

「……あ、あの」

美奈子は、それが自分の家に侵入してきた相手であることを、ようやく思い出した。

水瀬に抱きかかえられたままの美奈子は、やっと答えた。

「……どうぞ」

「感謝いたします」

物腰優雅に会釈するだけで、これほど魅力的に見えるものかと、同じ女として嫉妬を越えた感情さえ抱く美奈子の前で、金髪の女性は言った。

びっくりするほど、一言一句がはつきりと聞き取れる声だ。

「では、同道をお願いいたします。桜井様」

「……えっ？」

狙いは、自分だと美奈子は知った。

「先日の贈り物は、お気に召していただきましたか？」

「あ、あなた！」

驚く美奈子に、女は微笑んで言った。

「桜井……えつと」

「桜井……美奈子、です」

美奈子は、思わず答えてしまった。

「……ああ」

女は、美奈子が見とれるほど慈しみにあふれた眼を微笑ませた。

「感謝いたします。桜井……美奈子様」

「……同道つて、どこへ？」

「あなたは別です」

水瀬の声に、女はきっぱりと言った。

「我が主より、同道を命じられているのは、桜井美奈子様ただお一人」

「一緒に僕も行きたいな」

「……妨げるものあれば」

不意に、女の声に冷たさが走る。

怒っているのは間違いない。

この緊迫した中、不謹慎だと思いつつ、美奈子は、

美人が怒ると怖いなあ。

そう思った。

「殺せと　　そう命じられています」

「じゃあ、その主あさんの所へは、僕は僕で行くことにするよ」

水瀬は言った。

「名前と住所、教えて欲しいな」

「……はあ」

何故か、女はため息をつくくと、優しい口調ながら、有無を言わさぬ強い声で言った。

「お・こ・と・わ・り・し・ま・す」

「交渉は決裂……かな？」

水瀬はむしろ楽しげに言った。

「この前言った通り、僕は女の子と戦わない主義なの」

「……」

それまで微笑んでいた女の顔から感情が消えた。

「女の子とは戦わない？」

その声には明らかかな侮蔑が含まれていた。

「よくもそんなことを、私達の前で言えますね……」

「だから」

水瀬は言った。

「僕、君達と出会ったことないんだけど」

「……なら」

女は小さく、まるで自虐的なまでの笑みを浮かべ、言った。

「思い出して差し上げましょう」

「思い出す？」

「ええ」

女は微笑みながら頷いた。

「ただし、お願いがあります」

「……」
警戒する美奈子と水瀬の前で、女は言った。
「美奈子様」

「わ、私ですか？」

突然、声をかけられた美奈子は、思わず自分を指さした。

「はい」

女は微笑んで頷くと、美奈子に意外な事を言った。

「少し 眼をつむっていて下さい……耳も塞いでいてくださるとありがたいのですが」

「は、はい」

美奈子は目をつむり、耳を塞ぎかけ、自分の体勢にようやく気づいた。

「水瀬君」

「何？」

「降ろして」

「はい」

言われた水瀬は、抱きかかえていた手をそのまま離れたものだから

「お待たせしました」

数分後。

右手の甲をさすりながら、鼻を赤くした美奈子が言った。

その真横では、水瀬が壁にめり込んでいた。

「目をつむっていますから、どうぞご自由に」

「……拳が顔にめり込んだの、初めて見ました」

女のおきれ顔を後目に、美奈子は目をつむり、耳を塞いだ。

その仕草にクスリと小さく笑った女は、つぶやくように言った。

「そういう律儀な性格の方は、嫌いではありません」

そして、その視線を、ようやく壁から剥がれて床に落ちた水瀬に
向けた。

「水瀬様？」

「痛たたつ……はい？」

美奈子の必殺技“めりこみパンチ”をモロに喰らった水瀬は、顔
を押さえながらつぶやく。

「いつも、何で避けられないんだろう……」

「よろしいですか？」

「あ……戻った。どうぞ？」

「これを見ても」

シュルツ……フワツ……。

衣擦れの音がして、女の体から脱がされた衣服が床に落ちた。

女が、自ら衣服を脱いだのだ。

白い陶器のような艶めかしい、一糸まとわぬ肌が、水瀬の前にさ
らけ出される。

形のいい双丘。

絶妙にくびれた腰。

茂みに見え隠れする女の証。

突然の出来事に、水瀬の視線は、女の肌に釘付けだ。

「思い出していただけませんか？」

女がゆっくりと水瀬に近づく。

「あ……あの……」

水瀬は目を見張って女を見続ける。

ゴクリ

水瀬の飲み込んだ生唾の音が妙に高く響く。

「この体は」

何故か、一瞬だけ泣きそうな顔をした女が、自らを抱きしめるような仕草をする。

その細い両腕の中で、豊かな双丘が、男を狂わせんばかりに歪む。「あなただけに抱かれた……あなただけのものなのに……」

「だ、だから」

自分が誘われていることはわかる。

だが、女の言っている言葉の意味がわからない。

女は、自分と肉体関係があったと。そう言っているのだ。

「僕は袴子さん以外の女の人は　えっと」

水瀬はどもりながら言った。

「ナターシャさん位しか……えっと」

「まあ……」

女の手が、そっと水瀬に伸びる。

「私達は……女の数に入らないのですか？」

「っ！」

水瀬の喉が、自分でもびっくりした程素っ頓狂な声を上げた。

女の手が伸びた先。

そこは、水瀬の男性として最も弱い部分だったのだ。
そこをはい回る女の手。

それは、水瀬にとってには久しぶりに快楽であり、快楽に慣れていない水瀬という男の子には刺激が強すぎた。

水瀬は、自分の体が、その手に正直に反応したことを、嫌が上にも悟った。

「……まあ正直ですこと」

水瀬の男性としての反応を楽しむように、女の手が艶めかしい動きを見せる。

「ご立派ですね……これが……」

時に強く、時にいとおしむように動くその動きに、水瀬はもう動けなかった。

禱子さんだけ禱子さんだけ。

水瀬は何かを呪文のようにつぶやくだけだ。

ただ、それが決壊前の堤防に過ぎないことを、水瀬自身がもう悟っていた。

「私の……純血を……」

「あ……あの……」

半分泣きそうなまでの水瀬の声に、女は楽しげに答えた。

「これは罰です」

不意に、女の手が水瀬から離れた。

「私は、あなたに復讐します」

「へっ？　んっ!？」

水瀬は、不意に自分の唇がふさがれたことに驚いた。

女の顔が、びつくりするくらい、近い。

女に抱きしめられ、その体の柔らかさと、言いようのない香しい香りが、水瀬の男性としての本能を狂わせようとしていた。

禱子さん。ごめんなさい！

水瀬は心の中で叫んだ。

ちよつとだけ！

ちよつとだけ！

水瀬の腕がそつと女を抱きしめようと動く。

だが、女はその手から逃れるように、水瀬から離れた。

「え？」

「……今晩は、ここまでです」

いつの間にか床に落ちていた衣服を手にした女は、晴れやかに微笑んだ。

「お仕事がありますので」

「……へ？」

お仕事。

その言葉に、我に返った水瀬は、とつさに美奈子を見た。

水瀬の目の前で、いつの間にか、女と同じスーツを着た別な勝ち気そうな黒髪の女が、まるで汚物を見るような眼で水瀬を睨んでいる。

その腕の中に、ぐったりとした美奈子がいた。

「しまっ！」

水瀬が腰の霊刃に手を伸ばした時には遅すぎた。

フンッ。

勝ち誇った様な視線を残し、美奈子を抱きかかえた女が水瀬の目の前から、かき消すように消えた。

テレビポート
瞬間異動だ。

「私達は、今回の契約が履行される限り、この国にいます」

女の声に、水瀬は目を見開いた。

「ま、待って！」

「ではいずれ」

優雅な仕草で挨拶する女の姿が、水瀬の前から消えようとしていた。

「こ、こんなの困るっ！」

女は答えることなく、その姿を消した。

後には、ガラスや家具が散乱する部屋と、風に揺れるカーテンだけが残された。

「ぼ………僕」

テレビの音だけがむなしく響く部屋で、水瀬は悔しそうに、困ったように言った。

「………僕」

その視線は現実を見ていない。

水瀬が見ていたのは、脳裏に焼き付けられた、あの女のみせた胸であり、下半身の茂みであり、そこから連想した、女との、それこそ「小説家になろう」の通常版では表現出来ないレベルの激しい妄想だった。

「ぼ………僕………」

はぁ………はぁ………。

水瀬は、荒い息のまま、消えた女に救いを求めるように言った。

「ばっきんばっきんなんですけど……」

その姿勢は、無様なほど前屈みだった。

第十四話 「水瀬、動く」

「……で」

焼けこげた室内。

テレビは砕け、窓ガラスをはじめとした建具は軒並み破壊されている。

近隣の住民から警察へ通報が行ったらしい。

警視庁キャリアの愛人を通じて、現場に入ろうとする警官達を追い返した由忠は、室内を一通り見回した後、息子に尋ねた。

「美奈子ちゃんを無様に奪われた……と？」

無様。

その言葉を強調する父親に、水瀬は無言で頷いた。

「こんな室内で乱戦になったら」

「単に手を抜いたか、ドジっただけだろう」で

口元を尖らせ、言い訳する息子に由忠は容赦ない。

もし、この息子に本気になったら、この辺りがどうなっているか。いろんな意味で想像さえしたくない。

「相手は」

「この前、襲ってきた相手」

「女？」

「……うん」

由忠の見た息子の顔には、親にしかわからないものが浮かんでいた。

「……」

「……どうしたの？」

「喋れ。外見や、判断の付きやすい特徴は？」

その言葉に、水瀬は答えた。

「すっごい、ブス」

「ブス？」

由忠の眉がピクリと動いた。

「そんなにか？」

「うん。見るだけで気絶しそうなくらい。声なんてね？聞くだけでじんま疹出来そうだったよ？」

「ほっ？」

由忠は頷くが、どうひいき目に見ても、わざとらしい。

「そうか　　なら、私やルシフェルが関わるべき問題ではないな」

「そう！」

何故か水瀬は、力強く頷いた。

「この家の修理費は、僕がもつし、後の追跡も僕がやる。お父さん達は温泉でも行っていて？結婚記念日、近いんでしょ？どう？ルシフェルも」

「……そうか」

由忠の口元に、意地の悪い笑みが浮かんだのに、水瀬は気づきもしない。

「なら、お言葉に甘えさせてもらおうか」

「うんっ！」

水瀬はきびすを返し、小走りに玄関に向かう。

「リフォーム会社の手配だけお願い。僕、そういうのはわかんないから」

それだけ言い残すと、父親の前から姿を消した。

律儀にリフォーム会社との手続きを終え、由忠が水瀬邸に戻ってきたのは昼過ぎのこと。

どういうわけか、水瀬はまだ家に戻っていなかった。

「水瀬君が一人で追跡するのでしょうか？」

食事を終えた父親の前から食器を片づけるルシフェルが訊ねた。

「水瀬君にしては珍しいですね」

「まあ、そういうことだな」

ルシフェルの淹れてくれたコーヒーを楽しみながら、由忠は頷いた。

「少なくとも、責任感がどうのというのは違う」

「……違うんですか？」

食器を乗せたお盆を台所に持っていきこうとしたルシフェルの手が止まった。

「どういうことですか？友達が目の前でさらわれたら普通は」

「あいつに普通という言葉当てはめることが出来るか？」

「……それは」

「……あのバカ息子」

コーヒーカップをソーサーに戻した由忠が、何故か天井を仰ぎ見ながら言った。

「どうやら、敵の女が気に入ったらしい」

「……は？」

ルシフェルは、本気で怪訝そうな顔で父親を見た。

あの鈍感な水瀬君が、女の子に興味を持った？

しかも、敵の？

俄には信じられない。

「……陰気で無愛想で、近づくだけで葬式に参列した気分になれる。そんな女の子」

「敵が……ですか？」

「いや？」

由忠は、笑いをかみ殺しながら楽しげに答えた。

「どついつわけかあいつは、周りにいる女の子について、私が“どついつ子だ”と聞くと、昔から正反対のことを喋るんだ。ブスだと力説すればするほど、美人だと、そうなる」

「……ああ」

ルシフェルはそれで納得した。

「お父様の毒牙にかからないように、水瀬君なりに警戒していたからですね？」

「……」

「……それで？」

「……そういうことか」

そう呟く由忠の表情は、深刻そのものだ。

「はい？」

「それを一々鵜呑みにしたことがほとんどだった。俺は一体、何人の女との出会いをフィにしたんだ」

「……水瀬君の年齢からすれば、性犯罪のレベルかと。それであのバカ息子、今度であつたら夕ダではおkanz。そう怒る由忠に、ルシフェルは茶菓子を出した。

「水瀬君、止めないんですか？」

「止める？」

由忠は、娘の言葉に眉をひそめた。

「何故？」

「な、何故って」

ルシフェルは、父親の想定外の一言に声を詰まらせた。

「だ、だって。敵の女ですよ？」

「敵に寝返るようなマネはせん。あいつは結局……」

由忠の視線は、どこかルシフェルの知らない遠いところを見ていた。

「……結局？」

「さて」

由忠はそこまでいいかけて、座布団から腰を浮かせた。

「午後は昭博との約束がある。大学の図書館だ。ルシフェルも来るか？あの大学、お前の第一志望だろう？」

「帝都大学ですか？」

「そうだ。キャンパスのティーセットは絶品だと昭博が絶賛していた」

「おごっていただけですか？」

「親を信じる」

「はい。すぐに準備を　　ところで」

「ん？」

「さっきの陰気でどうのって、誰のことです？」

「ああ」

怒るならあのバカ息子にしてくれ。

そう言っつて、由忠はルシフェルを指さした。

その頃、水瀬は宮内省の図書館にあたる図書寮の休憩室にいた。午後の気だるい日差しを窓越しに浴びながら、水瀬は目の前の老人の話に聞き入っていた。

「この前、怪談話として教えてもらったのを思い出したんです」

「よく覚えていたな」

楽しげに頷いたのは、肥満気味な体を背広に押し込んだ老人。

顎が動いたたびに、胸元まで伸びた髭がモゴモゴと動く。

間宮教授。

東京帝国大学名誉教授にして、幕末史の権威として知られている。

「宴会の席上のことだ。誰も本気で聞いていないと思っただが」

水瀬の手作りの茶菓子を前に、教授は顔をほころばせている。

「……まあ、偶然が重なっただけじゃろう。一つを除いてな」

「一つ？」

「松笛じゃ」

「松笛？あの大魔導師の？」

「そう。松笛は謎の多い人物でな。」

少なくとも、河内時雨が京都で捕縛されたのと時期を同じくして、一度姿を消している。

再び現れるのは明治に入ってからだ。

おかげで、学者の中には、河内時雨殺害に直接手を下したのは彼じゃないのかと説く者が多い位だ」

「本人は否定しているんですか？」

お茶を出しながら、水瀬はそう訊ねたが、教授は首を横に振った。

「さてな。何しろ、わずかな問答しか記録が残っていないから何ともわからん。ただ」

「？」

「彼女を巡っては、もう一つ、別な事実があるのだ」

彼は、身を乗り出し、小声で言った。

「何です？」

「河内時雨を護送したのは浪人共とされているが、実は新撰組の腕利き達だ。一番隊の沖田、三番隊の斉藤がその筆頭だよ」

「まさか」

水瀬が驚いたのも無理はない。

新撰組。

つまり、今の近衛の母体。

それが絡んでいるとはつまり、この事態が水瀬の予想しなかった方角で厄介な代物だと、そういうことになる。

「そのまさかさ」

教授は頷いた。

「私が調べた限り、河内時雨が京都を出発し、殺害されたとされる約2週間……新撰組の行動記録には、この二人の名前をはじめ、かなりの人物の名前がキレイになくなっている。」

また、新撰組の会計記録には、旅銀名目で百両もの金が動いた記録が残っている。

支払い対象の隊士はざっと30名。支払い時期は二人が戻ってきた丁度翌日だ」

「偶然では」

「隊士の物見湯山で百両もの金を支払ったといのうか？」

「……」

金の面ではかなり厳しい組織。

それが水瀬の知る近衛だ。

聞いた限りでは、その伝統は新撰組時代にまで遡り、組の財政を一手に賄っていた賄方の梅という女性の、金に対するシビアさが根本にあるという。

金を巡っては、鬼と呼ばれた土方副長でさえ勝てなかったといい、そこから“大鬼”の異名をとったという、この梅という女性指揮下の賄方が、遊びのために百両をはたいたなぞ、その後身である近衛財務局会計課を知る身としては、想像さえ出来ない。

「新撰組がかなり関与していたと見る根拠は、こういうわけさ」
待ちきれない。といわんばかりに教授は包みをほどき、中の大福に手を伸ばした。

「……成る程？それで」

水瀬も湯飲みに手を伸ばし、大福をほおばる教授に尋ねた。

「どんな人だったかも？」

「甘さといい餅の軟らかさといい……絶品じゃ……」

大福を2つ、一気に食べた教授は湯飲みの茶を飲み干した。

「はつきり、美貌だけはすごかったという。新撰組の近藤、土方、斉藤あたりは随分とその死を惜しんだというからな」

「お墓は？」

「終焉の地については諸説あるが、新撰組の誰かが書き残した覚え書きが残されている。それを元にすると、今のT県M村じゃな。無論、死体というか遺骨が納められているとは思えないが」

「え？殺されたんでしよう？その、時雨って人、新撰組に」

「そこが謎なんじゃ」

「？」

「新撰組の腕つきき30人が一体、河内時雨になにをしたのか。斬ったのか？それとも、誰かに引き渡したのか？それは一切不明。先の松笛が言った、門になった。という言葉だけしか、何も分からない」

「……門」

「明治以降、倒幕活動で共に戦ったとする志士の誰かが、どこから聞きつけたか、ここで死んだと言い張って、墓を造った。そういうことだ」

「M村でしたっけ？」

「ああ。戦争で一時放棄された後、復興されたあたりだよ」

「……」
水瀬は、敵にしかけた魔法針の反応が消えたという報告を思い出していた。

敵は車を使って東京を離脱。高速から降りた後、数時間後に反応が消えた。

その消えた先。

そこが、T県M村だった。

偶然か？

それとも、意図的か？

「……どっちにしても」
水瀬は小さく呟いた。
「行くしかないか」

第十五話 M村

水瀬の携帯が鳴ったのは、図書館を出てからすぐだった。

ルシフェルからは鬼のような勢いで呼び出しがかかっていたが、嫌な予感が最大級の警告を発する水瀬は、その全てを無視していた。

またかと思つて見たら、相手は遥だった。

「悠理君？」

電話の向こうで、遥の嬉しそうな声。

不思議と、それだけで水瀬は心臓がトクンと鳴る。

「ようやく調べがついたわ」

「何の？」

「M村のこと。苦労したんだから」

「……」

「悠理君？」

「僕 頼んだっけ？」

「……」

「……」

「……」

「遥さん？」

「悠理君」

怒っているのはわかる。

だから、先に断ることにした。

「グーとパー、どっちもイヤ」

水瀬は先手を打ったつもりだったが、相手の方が上手だった。

「バキユンとグサツてどっちがいい？」

すぐ戻って！

戻ってこなければ殺すっ！

戻ってきたらもつと殺すからねっ！

凄まじい剣幕の遙に怒鳴られ、水瀬は遙の元に文字通り飛んで戻った。

その水瀬を待っていたのは、凄まじい形相の遙の出迎え。いや、出迎えと呼ぶにはあまりに乱暴な事態だった。

「ふうっ」

遙は満足そうに銃口から立ち上る硝煙を吹き消した。

その目の前では、スタボロ状態の、かつて水瀬だった残骸が転がっている。

「十分、反省した？」

「ごめんなさあい……グスッ」

「私がセクハラされても我慢して、M村のこと聞き出してきたのに」

「発砲しなかった？」

「大丈夫よ」

遙はモーゼル・ミリタリーに新たな弾丸を装填した。

「撃つたのはゴム弾だから」

「……」

「しかもっ！」

ビシッ！と、遙は指を立てた。

「その後でナンパまでされたのよ！？」

「どこの物好きが」

バコッ！

いつの間にかホルスターから抜かれた拳銃を逆手に持った遙の
撃が水瀬の脳天を襲った。

「本当に危なかったんだからっ！」

「……相手が」

ゴンッ！

「ポンポン殴らないでよおっ！」

水瀬は泣きながら抗議した。

「僕の方が上官なんだからあっ！」

そう。

水瀬は少佐。

遙は中尉。

階級万能社会では、水瀬の方が遙より立場は上なのだ。

「だつてえ」

遙は恥ずかしそうに身をよじりながら言った。

水瀬は、その愛らしい姿だけで、遙に対する抗議を忘れてしまっ
つくづくズルイ女だと、そう思ってしまうが、元来年上好みの水
瀬にはどうしようもない。

奇妙な話だが、むしろ役得かとさえ思ってしまう。

「悠理君の頭つてももの凄く殴りやすいんだもん」

「……」

「でね？」

遙は言った。

「M村は、現在の人口は300人程度の小さな村よ。たいしたこと
は何もない。産業は農業、お米だけ。戦後の新農本主義政策のおか
げで、新規就農者が少しずつただけど増えている。めばしいところは
そんなところね」

「ふうん？」

「それでね？その辺の伝承とか、民俗学的に詳しい教授がK大学に
いるっていうから、訊ねてきたの」

「民俗学的？」

水瀬は首を傾げた。

「奇妙な切り口だね」

「軍事的な意味で水瀬君がM村に興味を持つはずがない。むしろ、
オカルトチックな意味」

遙は小さく微笑んだ。

「そういうことでしょうか？」

「遙さんには勝てないなあ」

水瀬は苦笑して頷いた。

その通りだ。

河内時雨なら、歴史的、もしくは民俗学的な視点からのデータの
方がありがたい。

水瀬の言葉に満足したらしい遙は満足げに頷いた。

「タクシーで移動したってことにして経費もらって、電車と無料バ
ス、ついでに徒歩で大学まで行ったの。そのコレ」

遙は、ポケットからメディアカードを取り出し、水瀬の掌に置い
た。

「教授が持っていた、あの辺の伝承をまとめたデータ。教授のお薦

めは、葦の舟伝説よ」

「葦の舟伝説？」

水瀬はメディアアカードを弄びながら訊ねた。

「何？それ」

「詳しくは中を再生してね　　ヒルコは知ってるわね？」

「古事記の？」

「そう。イザナミとイザナギの最初の子だったのに、不具を理由に葦の舟に入れられて流されてしまった。そのヒルコの漂着伝説がある」

「……暇つぶしにはなるかな」

水瀬はメディアアカードをポケットに収めながら言った。

「ヒルコ伝説なんて、そんなおっかないものに関わりたくないもの」

「そうね」

遙も苦笑した。

「神様絡みの、しかも皇祖神に近い神様の事件なんて、私達がチヨコチヨコ関わられるものじゃないからね。ああ、そうそう」

ポンツと遙は手を叩いた。

「M村で一番目立つ施設は、学者村よ」

「学者村？」

「そう。偉い学者先生達が、静かな老後を送るために作り出した閉鎖型都市。まあ、リゾート施設ね」

「中に入れる？」

「いろいろあつて閉鎖されているけど　　これ、A24棟のカギ
ね。門は無入でしようから、どうにかして入って」

遙は水瀬に銀色の鍵を手渡した。

「その教授の別荘の鍵。テーブルに置いてあつたのを、粘土で型ど
りしておいた」

「やることが一々犯罪だよ。遙さん……」

「いいのよ。ロクな指導もしないで、肩書きだけで大金巻き上げる
あんな連中のほうが、よっぽど犯罪なんだから」

「……なんかあつたの？」

「昔の話」

「でも、僕も僕で友達が攫われちゃったし、いろいろあるから」

「データは目を通しておいてね？」

遙は言った。

「どこにどんなカギが込められているかわからないから。だいたい」

「だいたい？」

「私、これもらうためにお尻撫でられたのよ!？」

「それで……」

「腕ねじり上げてあげたけど、大したお金もらえなかった……最悪」
どっちが最悪なのか聞きたかったが、とりあえず水瀬は黙ることにした。

「それでも、ナンパされたんでしょ？」

「ええ。それが2件も」

「つまり、二人？」

「そう。一人が大学で、すごく背の高い、ボサボサ頭の人で顔は悪くなかったわよ？M村の資料、コピーさせてくれ。お金は1万円までなら払うからって」

「渡したの？」

「10万とお昼代でコピーさせてあげた　あ、そうそう」

「？」

「なんだか、幕末の有名人のお墓があるって言っていた」

「河内時雨？」

「そう。水瀬君に伝えておけて」

突然、遙の眼から光が消えた。

「遙　さん？」

「……」

ダンッ！

ダンダンダンッ！

突然、ホルスターから拳銃が抜かれ、引き金が引かれた。

問答無用の実弾が水瀬の足下に撃ち込まれた。

「は、遙さんっ!?!」

「コレハ、ケイコクダ」

無機質な声が、遙の口からこぼれた。

「？」

「カワチシグレカラ、テヲヒケ」

「……」

「サモナクバ、シガマツテイル」

「……後、知らないからね？遙さんにこんなことして」

「ケイコクハシタゾ？」

フツ。

糸が切れた操り人形のように、遙がその場に崩れ落ちた。

水瀬はそれを抱き留める。

「……二人目に難破されている間に、催眠術をかけられていたってわけだ」

河内時雨と駅。

その二つがキーワードとなって、警告を発するように暗示をかけられていたんだろう。

水瀬はそう判断した。

「……でも、何で？」

それがわからない。

河内時雨。

もう一世紀以上昔の人物だ。

その人物に一切関わるな？

何故？

わざわざ遥さんにこんなことしてまで？

「よくわかんないけど……」

水瀬は、遥が完全に気絶していること。

そして、周囲に人もカメラもないことを確認すると

「これが僕の役得」

そつと遥と唇を重ねた。

翌日、水瀬は再びバスに乗ってM村に向かった。

朝早く出発して電車とバスを乗り継いだ。

始発で出たというのに、もうお昼近い。

車中、ずっと考えることは、遥のことばかり。

さすがに遥が目覚めようとした時は肝を冷やしたのは事実だ。

目覚めた遥は、何もなかったように普段通りに水瀬に接してくれた。

「お昼に食べなさい」とおにぎりまで用意してくれた。

それが、何だか申し訳ないような、残念なような、複雑な思いを

水瀬にもたらしてくれた。

それもまた事実だ。

ただ

ふと、手を何度も握りなおしてみる。

この手が何を掴んだのかをかみしめるように。

「……」
思い出すだけで体が熱くなる。

目の前を流れる車窓が目に入らず、頭がぼつつとする。

キキイッ

プシューッ

バスが止まり、ドアが開いた。

バス停だ。

「あ、降りまあす！」

水瀬はリュックサックで腰の辺りを隠すように立ち上がった。

「……あれ？」

バス停の横には、軽自動車のような小さな車が、何故か運転席側のドアが壊れた状態で放置されていた。

ナンバーは品川。東京から来た車だ。

古くて年代物の車。

一瞬、盗難車が不法投棄された車かと思ったが、外装はキレイだし、中に荷物が置かれているから、どうも違うらしい。

「これ、トヨタかな？……パプリカ？」

水瀬はエンブレムから車名を読み上げたが、元来車に疎い水瀬にとって、

「へえ？こういう車もあるんだあ」

程度でしかない。

歩き始めた途端、水瀬は車のことを忘れた。

うつそうと茂る杉林をぬけた先。

どうやら峠のバス停だったらしい。

眼下には、予想していたよりもずっと広い盆地が開けていた。目にするものは一面の緑は、緑萌えるこの季節ならではの木々と稲の緑の見事なコントラストを描き出す。

緑の中に点在する異なる色が、その美しさを際立たせる。

それは、この地に人が生活している証のようなものだ。

「それにしても……どうしてこんな所へ？」

それがわからない。

東京へ攻めてきて、わざわざどうしてこんな辺鄙な場所へ戻る？ 敵が考えていることがわからない。

河内時雨というのに、そんなにこだわりがあるのか？

とりあえず、水瀬は景色を見回すと、再び歩き出した。

故郷である滝川村と大した違いのない鄙びた風景は、水瀬の目には東京の景色より心安らぐものがある。

まだ青い稲穂の上を飛ぶバツタを目で追いつつ、水瀬が目指すのは河内時雨の慰霊碑だ。

騒ぎの根元に挨拶しておこう。

そんな気持ちになったのだ。

「……」

ピタッ。

不意に水瀬の脚が止まった。

「……」

視線はまっすぐ道路をむいたまま。

ただ

「……」

ちらりと周囲を見回す。

緑の中、あちこちで何かが動いた。
人だ。

緑の中を、視線を避けるように、人が隠れた。

「……」

田舎特有の部外者を監視するクセが出ているのかとも思うが、気分のいいものではない。

自分が決して歓迎された存在ではないことくらい、わかっている。

「ま、いいか」

水瀬は肩をすくめると、知らんぷりを決め込んで歩き出した。

第十六話 慰霊碑

河内時雨の慰霊碑を見つけるのは、正直、骨の折れる作業だった。理由は簡単。

地図も何も用意せず、ただ当てずっぽうで村内を歩き回った挙げ句、慰霊碑の前を何度も通り過ぎたことに、水瀬が気づかなかつたからだ。

このままなら、おそらく慰霊碑を見つけるだけで半年はかかるだろう。

自分の方向音痴ぶりを嫌でも自覚している水瀬はそれを考えるだけでうんざりして、道ばたの石に腰を下ろした。

「……ふう。いい風だなあ」

田圃を渡るさわやかな風は、東京では忘れかけていた感触で水瀬を包んで汗を抑えてくれる。そして、見上げた空では、雲を流してゆく。

今の水瀬に出来ることは、歩き回るか、それともこうやって空を見上げるだけだ。

「……」

水瀬は空が好きだ。

どこまでも広がる無限の空の果てに何があるのか想像するだけで心が癒される。

空を眺めているだけで、イヤなこと全てを忘れることが出来る。

たとえば、無茶ばかり言ってくる上司とか、嫉妬に狂う彼女とか、

すぐ暴力を振るう姉とか、金に細かい親とか……。

忘れたいと思うのに、なぜか忘れたいモノが地獄の淵からはい出してくる錯覚を覚えた水瀬は、その場にひっくり返ろうとして

「わわっ!？」

自分が石に座っていたことに気づいたが、後の祭りだった。

「何をしてるんだね。君は」

モノの見事にひっくり返った水瀬の顔を、あきれ顔でのぞき込むのは、警察官の制服を着た中年のオトコだった。

「い、いえ……ちょっと」

痛たたっ……。後頭部をさすりながら水瀬は何とか起きあがった。ウィンドブレーカーのフードが少し、草の汁で緑色になっていた。「考え事を」

「……この辺では見ない顔だな」

あからさまに疑わしいという顔で、警察官 村の駐在

は水瀬から視線を外そうとしない。

「はあ……学校が休みなので、少し旅行を」

「学校、どこ？」

「東京です」

「東京からこんな所へ家出か？」

「は？」

家出？

水瀬はその言葉に嫌な予感を覚えた。

「まさか……あの、駐在さん？」

「親御さんに迎えに来てもらうから、駐在所へ来なさい」

「あ、あの？」

駐在は水瀬の手を掴むと、近くに止まっていた自転車に向かって歩き出した。

「駐在所はすぐそこだから」
「……」

それから10分後。

「……ここにあつたんだあ」
額に浮いた汗をぬぐいながら、水瀬は慰霊碑の前に立った。
慰霊碑といつても、それほど立派なものではない。

村の戦死者を奉る顕彰碑の影に隠れるようにして立つ石塊は、よほど注意しなければ何かの石碑だなんて、気づくはずもない。

その辺に転がっていた、墓石にもならないような石塊を、村の石工が見習いに削らせたといわれれば、そのまま納得してしまうほど、恐ろしく稚拙なシロモノが、生い茂った草の中に埋もれていた。

「御苦労様」

「はっ！」

ニコリと微笑んで振り返った後ろには、しゃちほこばって立つ駐在がいた。

「恐縮でありますっ！」

年季の入った敬礼に、水瀬は質問で答えた。

「あと、学者村ってどこ？」

「そのたんぼ道を抜けた先であります。塀がずらりとならんでいきますから、すぐわかると思います」

「今は閉鎖されている？」

「はい。あの村に喚ばれたら我々警察の力も及ばない厄介な所なので」

「……話が見えない」

「あつ。失礼しました。学者村についてのご説明がまだでしたね」
駐在は一礼の後、続けた。

「学者村は通称名です。我々はこう呼んでいます。“呪い村”と」

「呪い村？」

水瀬は眉をひそめた。

「随分、ご大層な名前だね」

「はい」

駐在は頷いた。

「ご指摘はごもつともです」

「何か由来でも？」

「少し前まで、学者村一帯は鬱蒼と茂る森でした」

駐在は語り出した。

「あの辺は、昔は森ではなく、田畑だった。

そして、その中心には大きな神社があった。

この神社にはどん欲な神主がいて、近隣の百姓に金を貸しては法外な利子を取り立て、私腹を肥やすことにはばかり熱心だった。

神社の持つ田畑も百姓から取り上げたもので、百姓は皆、この神主を鬼や悪魔として忌み嫌っていた。

ある日、百姓から巻き上げられる金に見切りをつけた神主は、神社に封じられていた魔物と契約して大金をせしめようとして失敗した。

契約の失敗により、神社と田畑は一晩で鬱蒼とした森に変わり、村の人々は、その森を恐れて“呪いの森”と呼び、何があっても枝一本採ろうとしなかった。

「でも実際には？」

「採った者はいたのですがね……なぜかその木を燃やして作った料理を食べると死ぬとか、不審火が起きるとか、災いをもたらすもつぱらの評判が立って」

「で、誰もその土地を？」

「ええ。誰も近づく者さえありませんでした。ところが」

駐在は顔をしかめた。

「その神主の子孫であり、土地の所有権は自分にあると言い出した者がいました」

「勝沼財閥？」

「そうです。あの死に神連中です。村の者の抗議に耳も貸さず、森を破壊してあんな閉鎖都市を造った。挙げ句にや自前で警備員雇ってるから警察は不要だとぬかしおって。ワシら警察もよう入れなかつたですわ。財閥が警察上層部えらいさんを抑えてましてね」

「へえ？で、そんな森に作られたから」

「そうです。誰が言い出したかは知りませんがね？“呪われてしまえ！そんな村”が短くなって“呪い村”となっただらうと、ワシなんか想像しております」

「成る程……でも、奇妙なのはそこじゃないよ。巡查長」

「は？」

「勝沼財閥はもう既に解体され、学者村は閉鎖されていると聞いているよ？それなのに、巡查長は、行方不明者があの村に向かったと聞いただけで捜査を止めた。何故？」

「……」

駐在は困ったように視線をさまよわせた後、それでも答えた。

「……お笑いになるかもしれませんが」

「どござ？」

「……その……実はいろいろと厄介な事件がありました」

「事件？」

「思い出せる限りで20人ほどが、あの村にかかわって行方不明に」

「……どういう、こと？」

「この村一帯も、あの戦争の時は一時的に放棄された場所です。戦争被害は、狩野粒子を含めて、被害は本当に軽微で済みましたが……戦後、ワシらが村に戻ってすぐです。学者村にはかなり金目のモノを学者センセイ達が残していったと、ウワサが立ちまして」

「まさか　泥棒？」

「そうです。」

あの学者村を取り囲む塀の外でウロウロとする不審者を何人しよう引いたか……。ところがです。

学者村は4メートル近い塀と深くて広い堀に囲まれています。

素人が入り込めるシロモノではないですし……実際、そんなウワサが立つてからすぐに、“学者村に行くと言って出かけたまま戻らない”と警察へ相談するケースが何件も寄せられました」

「それがみんな行方不明？」

「ええ……村の連中の証言で、何人かはこの村に来ていることはわかってはいるのですが、何しろ、その後がわからない。学者村に入り込んだ形跡さえ残していないケースがほとんどで」

「かといって、学者村は所有権問題から警察としても入り込めない」

「はい。あの戦争で、土地の所有権がこんがらがって、同じような事態に陥っている所は多いと聞きますよ？」

「4メートルの塀なんて、素人が越えられるシロモノじゃないしね」

「はい。警察としては、行方不明は行方不明として、ことを荒立てて学者村の捜索なんて騒ぎにしたくなかったのです。何しろ、戦後のこの混乱のご時世です。余計な騒ぎは、警察だって御免です」

「それでも、君たちは、どこかでわかっていた。方法はともかく、みんな学者村に入って　　殺されたか、とにかく死んだって」

「あの村にかかわって生きていた者はいない。

それに、この村はヨソ者を何かと嫌う。

私が駐在でいられるのも、この村の出だからに過ぎません。

他の者は半年と勤まりません。

ですから、本当は行方不明者の重要な情報を知っていたとしても、例え目の前で死体が転がっていても、それがよそ者のことなら関わろうともしませんです。

ヨソ者の事なんて知るものかというのが、この村のモンの本音ですから」

「……」

呪われた森を切り開いて村を作ったから、呪われた村になった。

バカな話もあったものだ。

水瀬は苦笑するしかない。

そこに自分から向かうしかないとなれば、もうどうしていいのか

想像さえ出来ない。

「巡查長」

「はっ」

「御苦労様。駐在所に戻ってすぐ横になりなさい。そして、僕のこととは全部忘れて」

「はっ！」

「さて」

自転車に乗って走り去る駐在の後ろ姿を見送りながら、水瀬はため息をついた。

「催眠術って、こういう時のために使うものだよねえ」

駐在にかけた催眠術は服従系の簡単なものだから、昼寝でもしてくれればすぐに忘れてしまっただろう。

「えっと……？」

とりあえず、水瀬はペンキのはげかけた慰霊の由来書を見た。

河内時雨 生没年不明（？）〜1863か？）

京都四条畷に生まれ

幼少の頃、宮中に入る。女官として頭角を現した後、明治大帝の乳母を勤め、後に幕末の混乱を憂いて下野。その志を同じくする者と共に尊皇攘夷運動に加わり多大なる活躍を示すも、仲間内の裏切りにより幕府に捕縛され、江戸へ運ばれる途中、この地にて殺される。

死体は発見されなかったが、様々な証言から、河内時雨がこの村で殺害されたことは間違いないとされ、恐れ多くも明治大帝の河内時雨慰霊の御意志を受け、当時の村民の出資により慰霊碑が作られ

る。

なお、殺害された場所はここより離れた場所、旧秋津浦神社あきつうら付近とされ、慰霊碑もその地に存在したが、土地改良作業に伴い、この地へと移転された。 H村教育委員会

「ああ……殺されたの、ここじゃなかったんだ」

へえ？水瀬は感心したようにリュックからペットボトルを取り出し、口を付けた。

中身は既に空だ。顔をしかめた後、水瀬は飲み物を求めて慰霊碑の前を離れた。

時津百貨店

古ぼけてほとんど読めなくなった看板の下、店先に商品らしきモノが並ぶ商店は、水瀬が迷子になった時、目星を付けておいた村内唯一の店だ。

他には自販機すら置いていない。

「……………」

自販機でペットボトルの水を買った水瀬は、キャップを開けながら、あたりを見回した。

見られている。

家々の窓の隙間から、いくつもの視線を感じる。

興味による視線ではない。

間違いなく、敵意にあふれた監視の視線だ。

でも、何故？

冷たい水ののどごしを味わいつつ、水瀬は内心で首を傾げた。

僕が警察だとしてもいうなら、まだわからないでもない。

桜井さんが失そうした後だし……。

でも、それならそれで、どうして隠れて僕を見るの？

僕がよそ者だから？

よそ者なら、そろそろ誰が“出ていけ”とでも言ってくるはずなのに……。

水瀬は意を決して商店の閉まったままのドアを開こうとした。

普通のアルミサッシのドアはびくともしない。

「？」

中に人の気配はするのに、ガラスに貼り付けられた「営業中」の札が揺れる下、サッシの鍵がかかっていた。

第十七話 宮中異変

この村が、自分を歓迎していないことだけは、そのカギでわかった。

腹いせに石でもぶつけてやろうかと思ったけど、とりあえず止めた。

他にもやらなければならないことはあるんだ。

「あれ？」

水瀬の携帯電話がなり出したのは、その時だ。

「……あつ。遙さん？」

相手は遙だ。

「どうしたの？」

『だから』

「何が起きたの？すぐ戻ってこいって」

『緊急事態。ちょっとスゴいことが起きたから』

「？レポート使っていない？」

『ダメ。普通に来て』

「半日かかるよ？」

『悠理君は、何のために空が飛べるの？』

「面倒くさいよ。電車の特急料金、ついでにお弁当とお茶、経費で落ちないの？」

『グーとパー、どっちで殴りたい？』

「すぐ行きます」

「私、空飛んでこいって言ったのよ？」

水瀬の頭に来たでっかいタンコブに湿布を当てながら、遙は呆

れ顔で言った。

「レポート防御シールドが昨日から強化されたの、知らなかったの？」

「知らないよお……」

場所は宮城の一角。

飛行が面倒くさいという理由でレポートによる進入を試みた水瀬はモノの見事にレポート防御シールドにひっかかり、連動する警報システムが作動、捕縛された拳げ句、樟葉にブン殴られ、巨大なタンコブを作ったのだ。

「それにしても……饗庭中将もここまで殴らなくても」

「うつつ……年増のヒステリーって言い返したただけだよ？」

「言い過ぎ」

「何か言いたいことがあるならいつてみやがれっ！」って言ったの、樟葉さんだよ？だから」

「だから」

湿布を貼り終わった遙は諭すように言った。

「相手のこと考えて、それが言っつていい言葉かどうか、喋る前に考えなさいって言われているでしょ？」

「……うん」

「袴子ちゃん怒らせたあの時、自分から約束したのは、悠理君なんだからね？」

「……うん」

水瀬は頷いて、

「それで？何が起きたの？」

「昨晚、宮中に侵入者があったの」

「それで？もう始末されたんでしょ？」

「それがね？」

「まさか」

水瀬は目を見開いた。

「に、逃げられたの？」

遙は無言で頷いた。

「防衛隊は壊滅したけど、死者は確認されてない」

「樟葉さんがイラついていたので、生理不順じゃなかったんだ」

「こらっ！」

遙のチョップが悠理のタンコブにクリーンヒットした。

「そういうこと言っちゃいけませんって、何度言えばわかるの!？」

こらっ! お姉さんがお説教してあげているのに、白目むいて

気絶するなんて、許されると思っっているの!?! こらっ!」

「……なんだ、その頭は?」

「放って置いて下さい……ぐすっ」

「タンコブの上にタンコブとはな……本当に愉快的なヤツだ」

「下のタンコブ作ったのは樟葉さんでしょ?」

「お前が作って下さいとおねだりしたからだ」

「言っていないよお」

「もう一個、作って欲しいか?」

「うっっ」

水瀬は恨めしそうに言った。

「僕の背が伸びないのは、お父さんと樟葉さんとお師匠様にゴチゴチ殴られているからだあ……」

「生まれつきを人のせいにするな。ところで、さっき聞き損ねたが、何のために宮城へテレポートした? しかも無断、無許可、不法で」

無断、無許可、不法を険悪なまでのトーンで口にした樟葉は、顔こそ笑っているが、目が怒っている。

「樟葉さん」

言いかけて、水瀬は慌てて口を押さえた。

「ん? どうした?」

「な、何でもなしよ」

「言いかけたことを途中で止めるのはマナー違反だぞ?」

「怒らない?」

「ああ」

「……そんなに怒り方すると、シワになる」

ガンツ!

「怒らないって言ったでしょ!」?

頭の上でタンコブがツインターワーになった水瀬が泣いて抗議するが、

「知るかつ!」樟葉はそれを一喝する。

「ワケを言えっ!」

「だから、何だか知らないけど、宮中に侵入者があったから戻れって、遙さんが」

「……ああ」

樟葉は、納得したという顔で頷いた。

「事態が事態だから、涼宮中尉がお前を呼び戻し、お前は中尉の警告を無視した挙げ句がこの失態というわけか」

「何があったの?」

「……お前には関係のないことだ。その件は他の部隊が当たる」

「じゃ、いいの?」

「ああ 下がっていい。ついでにしばらく遊んでいいぞ?」

「本当?」

「しばらく、私の権限で、お前を近衛の任から解く」

「……え?」

「どうした?疑わしいって顔だが?」

「僕、そんなこと聞かされたために、こんな目にあっただの?」

「自業自得だ」

「何だか理不尽だなあ……それで」

水瀬は訊ねた。

「何があったの?」

「関係ない以上、知る必要もない」

とりつく島もないとはこのことだ。そう言わんばかりの樟葉の前に、水瀬は助け船を求めて、樟葉の後ろに立つ副官の篁少佐たかむらを見た。端正な顔立ちの篁少佐は、そんな水瀬の視線に眉一つ動かさずと
はしない。

「侵入者があつたんでしょ？僕でも何か役に立つと」

「昨晚、あそこに侵入者があつたことは把握している」

樟葉は冷たい視線で、水瀬の言葉を遮った。

「それがどうした」

「……あの」

「既に他部隊が従事中だ。それと、本件の一切については、厳重な
箝口令が敷かれている。お前達も近衛の一員なら、その意味を正し
く理解しろ」

「……あの？」

「下がれ。私は忙しい」

革張りの背もたれの高い椅子に腰を下ろした樟葉の目は殺気立っ
ている。

その眼光に気圧され、樟葉の横に立つ篁副官の気の毒そうな視線
に励まされるように、水瀬は敬礼の後、樟葉の部屋を出た。

パタン。

「……ハアッ」

樟葉は水瀬が部屋を出た途端、力尽きたように椅子の背もたれに
体を預けた。

「全く……なんて事態よ」

「侵入者に関する情報は、これを除いて、すべて抹消させました」
篁副官が執務机の上にDVDを置いた。

「現地の全部隊への記憶操作は本日1500までに終了」

「……馬鹿げている。そうは思わないか？」

「無理もありません」

DVDの上に突っ伏した樟葉に篁副官は複雑な感情を浮かべた顔で言った。

「あの施設へ侵入を許したこと。そして、その侵入者の素性……この二つが近衛内部に広がれば、とんでもないことに」

「……その最悪に輪をかけてくれそうなのが今、目の前から消えてくれた……」

「私も、あの子とのことは、噂でしか知りませんが」

「噂だけで十分よ。本当、真実をあの子が知ったら悪夢よ？何しろ

」

「ストップ」

カチッ。

篁副官が、樟葉の言葉を止めるなり、机のボタンを押した。

ドアの開閉ボタンだ。

「わっ!？」

突然、ドアが開いたせいで部屋に転がり込んだのは、水瀬だ。

ドアに耳を押し当て、樟葉達の会話を聞いていたのは間違いない。

「お前なあ」

「……つまり」

樟葉の執務室前でバケツを頭に寄せ、両手にも持たされた水瀬が自問した。

私がいって言うまでそうしてる！

樟葉が命じた結果だ。

「その侵入者って、僕の知り合いだったことだよな？」

両手どころか頭にまでバケツを乗せられた水瀬は首を傾げようと
してやめた。

バケツの中に入った手榴弾を爆発させたくない。

「でも……」

考えれば考えるだけ

「やっぱり、ヘンだよな？」

そう思わざるを得ない。

樟葉は、侵入者があったことそのものを、僕に知らせたくない。

責任問題になる？

ううん？

僕と責任問題は関係ない。

第一、そんな姑息なマネする人じゃない。

「……おかしいよねえ」

そう、どう考えてもおかしいのだ。

「樟葉さんはその侵入者から僕を遠ざけようとするんだろう？」

うーん。

つい、思わず傾げた首のおかげで、バケツが頭から落下し

そして

「わわわっ！」

「貴様は人に迷惑かけなければ、反省も出来ないのか！」

「バケツに手榴弾入れたの樟葉さんでしょ！？」

バケツから落ちて火のついた手榴弾。

それを掴んだ水瀬は、問答無用で樟葉の部屋に投げ込んだ。

当然、怒り狂った樟葉にボコられたのだ。

「その程度、どうにかしろっ！処分に困ったからと言って、上官の部屋に投げ込むとは何事だっ！」

「理不尽だあっ！」

「どっちがだっ！」

第十八話 「諸悪の根元は語る」

「気を悪くしないで聞いてくれ」

水瀬が樟葉にたつぷり説教を喰らっている頃、ルシフェルを前に、由忠はそう切り出した。

場所は由忠の執務室。

将官用に設計された広い室内には、由忠と涼宮遙中尉すずみやまはるかの姿があった。

すずみやまはるか
涼宮遙中尉。

千里眼と呼ばれる能力

サード・アイ
第三眼の持ち主として一年戦争全般

において早期警戒・索敵任務で活躍した。

その探索範囲とその精度は人類史上最高レベルと聞くが、どこをどういう経緯をたどれば、そんな気の毒な立場に立たされるのか、現在は水瀬の専属CPOという、ルシフェルではないが気の毒すぎる立場にいた。

「あのバカ息子は、近衛の任務から外される」

「何故ですか？水瀬君がどれだけ問題起こしても、それだけは」

「あいつは、美奈子ちゃんみなのこちゃんの探索に全力を傾けてもらうということ
ね」

由忠は肩をすくめた。

「そして俺達は、近衛の正式な任務を受け、行動することになる」

「はい」

「よし。まず、任務の概略から説明しよう」

由忠はそう言つと、机の上にあつたりモコンを手にした。

「事件の経緯についてだが　ん？」

由忠は壁めがけてリモコンのボタンをさかんに押すが、何も起き

ない。

「おかしいな　　故障か？」

「閣下」

「中尉、これは再生ボタンを押せばいいんだらう？」

「あのですね？」

遙が由忠の手からリモコンをもぎ取ってボタンを押した。

「その前に、主電源を入れてください」

「そ……そういうものなのか？」

「そうです」

遙が操作しているのは、どうやらプロジェクターのリモコンらしい。

ルシフェルは、執務機の端に置かれた遙のものらしい小型端末に気づいた。

「ルシフェちゃんには、信じられないかもしれない情報だけど」

確かこのフォルダに……あ、これだったかな？

遙はいくつかのフォルダを開いた後、画像を表示した。

「……」

映し出された画像を見て、目が点になったのはルシフェルだけじゃない。

由忠でさえそうだ。

「失礼しました」

ただ一人、遙だけが平静を装って、手早くリモコンを操作、別なフォルダを開こうとする。

「す、涼宮中尉？い、今のは？」

「気にしないでください。事故です」

「裸の男同士が絡んでいたような気が？」

「気のせいです」

「た……確かに、私には信じられません」

「錯覚です あった」

二人からの冷たい視線をはじき返しながら、遙は一つのフォルダを開いた。

「ドライブはEじゃなくて、Fだったんですね 今回の事件については不明な点多すぎます」

「俺には、中尉の趣味の方が不明だが……」

「何か？」

「……いえ」

プロジェクターに映し出されるのは、ルシフェルにはどこか見慣れたような場所だった。

「これ……神社の倉庫か何か？」

「そう思ってください。正確な場所については、私も知らされていません」

「遙さんも？お父様はご存じなのですか？」

「……問題は、どこで盗まれたかではない」

由忠は言った。

「何が、誰に盗まれたか、だ」

「はい」

「とにかく、教えられる限りは教えておこう。場所は宮中。昨夜、侵入者があり、全ての防衛網を突破、保管されていた宝物を盗み出した後、逃走。現在に至るも足取りは不明」

「……遺留品は？」

「ない」

由忠は即答した。

「監視カメラも破壊されたため、映像が残っていないと報告を受け

ている。ありえない話だがな」

「……」

ルシフェルもそう思う。

宮中の防衛網は、ルシフェルでさえ、そう簡単に突破出来るものではない。

その上、監視カメラに姿を残さないとすれば、ルシフェルには出来る自身が全くない。

それをやってのけた？

一体、どんなバケモノだ？

「それで、だ。ルシフェル」

「はい」

「現時点では、ここまで知っていればいい。新たな情報が入り次第、連絡する」

「？あの」

ルシフェルは首をかしげた。

「肝心の、何が盗まれたか、まだ聞いていませんけど？」

「うむ。いい質問だ」由忠は満足そうに頷いた。

「実は　俺も知らん」

「……は？」

「あのね？ルシフェちゃん」

遙が申し訳なさそうに言った。

「賊が侵入した所って、実は半世紀近く、正確には作られてからずっと、満身に誰も入ったことのないような、いわば開かずの間なの」

「開かずの間？」

「だから、ここに何が収蔵されていたのかは、記録を当たらなければならぬのだけど、これがいろいろと厄介で」

「？」

「同じ部屋にあつたらしいんだけど、過去に封印されて、そのまま行方不明になっていた妖魔とか、爆発系の呪具とかが暴れ出しちゃ

ってね？左翼大隊第一中隊が総掛かりでかかってはいるけど、未だ勝負がついていないの」

「……つまり」

ルシフェルは話をまとめた。

「何が収蔵されていたかを知るにしても、収蔵品そのものが暴れ出して、何もわかっていない……そういうことですか？」

「そうだ」

由忠は満足そうに頷いた。

「さすが俺の娘だ。よくわかったな」

「……とりあえず」

ルシフェルはあきれ顔で父親の顔を見るのが精一杯だ。

「さっさと妖魔を撃破する方に動くべきでは？」

「ルシフェルがそう望むなら、俺は父親として動いてやろう」

「……お願いします」

ルシフェルは言った。

「一度でいいです。マトモな父親をやってみせてください」

近衛は、侵入者に逃走された後、即座に遙以外の第三眼サイドアイによる追跡を開始した。

だが、宮城の中でその反応が消失。以降の足取りは全く確認出来ずにいる。

テレポートにより宮城を脱したものと断定可能。

報告ではそうになっていたが、由忠はそれに納得していない。

由忠自身もその程度しか報告を受けていない。

宮城とその周辺は、魔法騎士による奇襲攻撃を阻止するため、原則としてレポートが一切不可能な魔法陣を展開している。

この魔法陣を突破出来るとすれば、それはごく限られた超高位魔法騎士くらいなのだ。

事実、先程、あのバカ息子が侵入に失敗したと報告を受けている。つまり、相手はあのバカ息子より優秀となる。

そんな魔法騎士が、よりによつて盗人になるはずがない。

だが　　実際は違う。

警戒厳重な宮城に侵入。

一人も殺すことなく、すべての騎士達をねじ伏せ、

誰もが忘れていた宝物を盗み出し、

悠々と宮城を脱出した

全てに要した時間はわずか15分。

由忠でさえ、見事というしかない手際だ。

だから、相手が誰か知りたいと、由忠も思った。

しかし、ここで奇妙な連中が横やりを入れてきた。

近衛元帥府

別名幹部会議と呼ばれる近衛兵団の最高諮問機関だ。

事態の連絡は、この元帥府を経由し、由忠に伝えられた。

監視カメラに映像は残らず、

騎士達は記憶を失い、

足取りは一切不明。

つまり、誰がどうやって、何を盗んで、どこに消えたか？その一

切が不明だというのだ。

ありえるか。

そんな報告を前にすれば、由忠でなくても、そこに何か意図的なものを観じずにはいられないだろう。

元帥府は何かを隠している。

いや

元帥府は何かを隠滅した。

そう言うべきだろう。

真実を知る者のうち、由忠が接触出来るのは、おそらくは樟葉とその副官である篁だけだろう。

痛めつけて聞いてやるうかとも思ったが、樟葉は自分の上官だし、篁は口を割る前に自殺しかねないカタブツだ。

あの樟葉の側にいたら、嫁のもらい手なくなるぞ？

篁の美貌を思い出しながら、心底残念だと由忠は思わざるを得ない。

いつそ、俺の愛人に……。

ふと、そんなことを考え、由忠は脱線気味の思考を戻した。

相手が誰かは知らない。

何が盗まれたかもわからない。
そこでさじを投げるわけにも行かない。
だから、由忠は発想を変えた。

単に、盗人が盗品をどうするか。

それだけを考えたのだ。

盗品の使い道はどうしても二つに絞られる。

使うか

売るか

使うとなれば、事後確認が出来る。
もっと厄介なのは、売る方だ。

とにかく、バイヤーをあたるしかない。

そっちの方が近い。

どうせ、あの店だ。

盗まれた場所の特殊性から、由忠がすぐに思いついたバイヤーの
店は一つ。

出来れば、ここにだけは来たくなかった。

小雨の降る街角にぽつんと立つ古ぼけた骨董品店。

ここに来るのは何年ぶりだ？
由忠はため息一つ、そのドアを開いた。

ドアには、古い字体で、天原骨董品店 そう、書かれていた。

「……………」

空気までが古ぼけているような錯覚にとらわれる店内は、由忠が最後に訪れた時そのままに、時を止めているようだった。

入り口のショーウィンドウに飾られた色あせたフランス人形の虚ろな目。雑然と積まれた正体不明な金属の塊。

迷路のような店の造り。

すべてが何も変わっていない。

不思議な感慨を抱きつつ、由忠は誘われるように店の奥へと入っていった。

「おお。由忠ではないか！」

誰もいないと思っていたレジの後ろから、少女の明るい声がした。

「久しぶりだな。かのん」

「うむ！何年ぶりじゃ？」

「悠理が生まれて以来か？」

「もうそんなになるか？懐かしいのお」

カノンは、湯気を上げるティーセットを載せたお盆を、縛られた革張りの本の上に置いた。

「ところで由忠、このレジは覚えているか？」

「ああ。ガキの頃、このレジから金盗み出して、何度お袋に殺されかけたか……………」

「妾も巻き添えになって大変じゃったからなあ……………」

「お前も一枚かんでいたろうが」

「何じゃ？」

かのんは不満げに、その人形のような顔をしかめた。

「幼なじみ、しかも筆おろしの相手にそれはないじゃろうが」

「へいへい……昔の恋人には親切にしますよ」

「ふん。昔の純情さはどこにいったんじゃ……」

さみしいぞ。と、かのんは口元をとがらせた。

「ところで、お袋に会いたい。通るぞ？」

「ああ……ご主人様にお茶をお持ちするところじゃ。ついて来い」

通路を幾度も曲がった後、由忠は黒光りする頑丈な古代檜で作られたドアの前に立った。

「ここに来るには、お前かお袋が必要つても大変な話だな」

「防犯上のことじゃ。無理に侵入した愚か者は永遠に続く“無限回廊”に送られ、未だ死ぬことも出来ずに藻掻いておるわ」

かのんはドアを叩いた。

「ご主人様？由忠がお見えじゃ」

「由忠が？」

ドアの向こうから、かのんによく似た声が聞こえた。

「入りなさい」

「ふうん？」

由忠から説明を受けたのは、由忠の母

神音かみねだ。

「宮中に侵入者。しかも何かを強奪された……か」

「……あの」

母親の前に、由忠は小さくなるしかない。

目の前にいるのは、どうひいき目に見ても小学生なのだが、それでも実の母親であり、外見からは想像さえ出来ないその恐ろしさは、

子供の頃から骨身にしみている。

「近衛には第三眼サイドアイがいるでしょ？たしか、悠理の部下にも」

「彼女にも発見出来ていません」

「使えないわね」

「すみません」

「で？盗品だからって、ここに来たと？」

「はい。ついでに、宮中侵入の手ほどきなんかしてないか……と」

「由忠」

カチャ。

手にしたティーカップをソーサーに戻した母親の鋭い声に、由忠は無意識のうちに姿勢を正した。

「私にも仁義というものがあります」

「はあ……」

「代々、水瀬家が忠節に励んだ皇室に対し、何故私が弓を引くが如きマネをするか？」

「か、関わっていないのですか？」

「私から購入したブツをどう使おうが、私の知ったコトじゃありません」

「あ……あの、それがマズ……」

「由忠。いいこと？私は商人です。売ったモノの扱いまで責任はとれないわよ？」

「し、しかし……それなら」

「相手が誰か？知りたいなら情報料を支払いなさい。これはビジネスです」

「……いくらですか？」

神音はその細い指を二本立てた。

「悠理に請求してください」

「それでも親？」

「それは僕のセリフです 成立ですか？」

「まあ、いいでしょう……それで、何を知りたいの？」

「まず、犯人……いえ、取引相手について」

「そうねえ……」

「本名を」

ちよつと言い淀んだだけで、由忠は母親を制した。

「仮名偽名はご遠慮下さい」

「本当に面白みのない子……どこで育て方間違えたのかしら」
神音は憮然としてカップに口を付け、

「一々覚えていくワケないじゃない。バカね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0150f/>

木乃伊の手首

2010年10月10日21時05分発行